江淹の「傑作の森」―呉興時代の賦作―

福井佳夫

目次

一　傑作の森
二　恨人
三　楚辞ごのみ
四　呉興左遷
五　懐才不遇
六　託物言志
七　四時への託物
八　感傷の人

一　傑作の森

江淹（こうえん）（四四四〜五〇五）の生涯を概観してみると、三十代の前半に、不幸の襲来と創作の高潮とが、連続して発生している。すなわち、建安郡の呉興県（現在の福建省の浦城あたり）の令に左遷されていた、あしかけ四年、実質三年の日々――それが、この不幸と創作とが継起した時期である。

このころ、彼は主君だった劉景素の不興をかって、辺地の呉興に左遷された。そのうえ、期待していた第二子が一歳余で死に、さらに自分の妻まで病でうしなった。ところが、そうしたうちつづく不幸に、逆に詩嚢が刺激されたのだろうか、この時期に江淹は、にわかに創作意欲がたかまったのである。そして「去故郷賦」や「傷愛子賦」「悼室人詩」等の名作を、ぞくぞくと執筆していったのだった。

こうした、不幸の襲来と創作の高潮とが、おなじ時期に継起してくる現象は、じつにふしぎだし、また皮肉なことでもあろう。

ただ芸術の世界では、この種のことが、ときどき発生している。すぐ想起されるのが、ドイツの作曲家、ベートーヴェン（一七七〇〜一八二七）の「傑作の森」の事例である。三十二歳（一八〇二）のころ、彼は耳疾にくるしみ、「ハイリゲンシュタットの遺書」をかくほど、はげしい苦悩の日々をすごした。しかしその苦悩が、彼の創造力を刺激したのだろう。つよい意志でこの精神的危機をのりこえるや、彼はとつぜん、おおくの傑作をかきはじめたのである。エロイカ交響曲、ワルトシュタイン・アパッショネートのソナタ、そしてラズモフスキーの弦楽四重奏曲等々。後年、ロマン・ロランはこの期にうまれたベートーヴェンの傑作群に賛嘆し、それらを「傑作の森」と名づけたのだった。

私も、このロマン・ロランに模して、江淹の呉興時代の名作群をやはり「傑作の森」と称し、またその期を「傑作の森の時期」とよぶことにしたい。そして、江淹の傑作の森のなかでも、とくに名作がそろった賦ジャンルに焦点をあてて、その概要を紹介してゆきたいとおもう。

まず江淹の賦作品を概観しておこう。

江淹は、六十二年の生涯において、「○○賦」と題した作をつごう二十七篇つくっている。そのうち、呉興に左遷させられるまえ、年齢でいえば三十一歳の夏（元徽二年、四七四）以前につくったと目される賦は、つぎの六篇である。[1]

◎哀千里賦　25歳（468）、湘州への旅途での作。現存で最年少の作。恨人ふう。
江上之山賦　29歳、託物言志。景素を諷諫。
扇上彩画賦　30歳、託物言志。景素を諷諫。
○丹砂可学賦　30歳、遊仙への憧憬。
◎燈賦　31歳、宋玉「風賦」に擬する。景素を諷諫。
●傷友人賦　31歳、亡き友への哀傷。

つづいて、呉興令に左遷されていた三十一歳秋から三十四歳のころ（四七四秋〜四七七。赴任途上の作もふくむ）、つまり江淹の傑作の森の時期につくったとおもわれる賦をあげてみると、つぎの十六篇である。

●去故郷賦　31歳（474）、呉興への旅途での作。自己を屈原に擬する。
●泣賦　31歳、呉興での作。「恨賦」「別賦」の前駆。
◎青苔賦　31歳、呉興での作。託物言志。

◎倡婦自悲賦　31歳、呉興での作。棄婦の情。
●赤虹賦　32歳、呉興での作。遊仙への憧憬。
◎四時賦　32歳、呉興での作。託物言志。
◎石劫賦　32歳、呉興での作。託物言志。
●待罪江南思北帰賦　32歳、呉興での作。北帰の情。
●傷愛子賦　32歳、呉興での作。亡き子への哀傷。
◎麗色賦　33歳、呉興での作。「招魂」に擬する。
　水上神女賦　33歳、呉興での作。曹植「洛神賦」に擬する。
◎空青賦　33歳、呉興での作。鉱物をたたえる。
　蓮華賦　33歳、呉興での作。託物言志。
　翡翠賦　33歳、呉興での作。託物言志。
　金燈草賦　？　託物言志。
　学梁王兔園賦　？　枚乗「梁王兔園賦」に擬する。託物言志。

そして辺地の呉興から、建康や京口に帰還したのは江淹三十四歳、元徽五年（四七七）のときであった。これ以後、彼は六十二歳で死ぬまで二十八年の時間があった。このいわば後半期につくった賦をあげると、

　恨賦　34歳（477）？　京口での作か。恨人ふう。
　別賦　34歳？　京口での作か。恨人ふう。
　知己賦　34歳、京口での作か。亡き友への哀傷。

横吹賦　35歳、横笛をたたえる。

●霊丘竹賦　46歳、応詔の作。

＊右のうち、◎を附した賦は本稿で全訳し、○を附した賦は部分訳しておいた。また●を附した賦は、拙稿「江淹評伝」「江淹の赤虹賦について」で全訳しておいた。

となる。二十八年でわずか五篇だけだ。このうち「恨賦」と「別賦」とは、呉興時代の作だとする説が有力である。私見によって、あえてこの時期の作だとみなしたが、もしこの二篇も呉興の作だとしたなら、この期の作はさらにすくなく、三篇のみということになる。その意味で、江淹の後半期（北帰後の二十八年）は、創作不振の時期だったと称してよさそうだ。当時の人びとは、こうした後半期の創作不振をふしぎにおもって、「江郎才尽」という話柄をつくって、おもしろがっていたらしい。

こうみてみると、生涯につくった二十七篇の賦作のうち、過半が呉興時代につくられたことになる。江淹が呉興に左遷させられていたのは、あしかけ四年（元徽二年〈四七四　三十一歳〉～元徽五年〈四七七　三十四歳〉）だが、実質的には三年間だった。すると単純計算で、一年に五篇強の賦をつくったことになる。もちろん、賦以外の詩文もつくっているわけだから、この呉興時代がいかに多産だったかが了解できよう。

この時期、彼は左遷という憂きめにあったうえ、期待していた第二子が夭折し、さらに妻まで病死した（また呉興出立の直前、親友まで死んだ）のだから、たのしい日々をおくっていたはずがない。それゆえこの期の作は、おおく「［左遷されて］つらい」「［建康に］かえりたい」「［妻／子／親友の死が］かなしい」という内容でしめられており、悲痛な感情にみちている。江淹はそうした陰鬱でしめっぽい心情を、詩や文において、ジメジメ、ウジウジと、そしてしつこく、大仰に、吐露しつづけたのだった。

ところが、そうした陰鬱でしめっぽい江淹の詩文は、きらわれるどころか、かえって人びとの琴線にふれるところがあったようだ。そのため、この期の諸作のおおくは、当時はもちろん、後世においても、名作とたたえられ、江淹の「傑作の森」をかたちづくることになったのだった。たとえば清の姚鼐は、この時期の江淹の詩を評して、

江淹の詩が卓越していたのは、宋斉の間のころであり、まだ［左遷されたりして］高官に達していなかったから、佳作がかけたのだろう。それゆえ、逆に［斉朝成立後］立身して名声がたかまってくると、煩雑な政務によって邪魔されて、詩嚢が枯渇してしまったのだった。あの江郎才尽の逸話は、どうして誤解だなどといえようか。

江詩之佳、実在宋斉之間、仕宦未盛之時。故名位益登、塵務経心、清思旋乏。豈才尽之過哉。

とかたっている（『惜抱軒筆記』巻八）。

ここでは詩ジャンルにむけたことばだが、この批評は、江淹の詩文全体にも、あたっているとしてよかろう。江淹は、この「宋斉の間」「高官に達していなかった」ころ、つまり呉興の左遷時にこそ、佳作を輩出したのだった（ちなみに江淹には、ベートーヴェンのごとき充実した後期の傑作群はない。彼の後半期は、立身こそしたものの、創作の面では「江郎才尽」だった）。

本稿は、こうした呉興左遷時の詩文、なかでも賦ジャンルの作に焦点をあてて、その内容を考察してゆく。そしてこれらの賦作は、前後の時期の賦とどうちがうのか、なぜ「傑作の森」となったのか、どうした意義や価値があるのか――等について、私なりの考えをのべてみたいとおもう。

二　恨人

高橋和巳氏は、論文「江淹の文学」（『作品集9　中国文学論集』河出書房新社　一九七二）において、江淹の詩文は感傷主義の文学である、と認定された。この認定は、じつに卓抜なものであり、さきにのべた私の「陰鬱でしめっぽい」という感想も、この高橋氏の御論に示唆されたものである。

氏の認定に関連して、さらに注目したいのは、江淹自身が、おのれのそうした性癖を自認していたということである。彼は代表作「恨賦」の冒頭で、つぎのようにかたっている。

平原［の墓場］をながめると、蔓草が人骨にからみ、大木に魂魄があつまっている。ひとは最後にこうなるとおもえば、天道をあげつらってもしかたないことだ。こうおもうと、もともと多情多恨な男である私は、心さわいでやまなくなる。さればわが思いは、無念の情をいだいて死んでいった古人のほうに、むかってゆくのである。

試望平原、
「蔓草縈骨、人生到此、天道寧論。
拱木斂魂。
於是僕本恨人、心驚不已。直念古者、伏恨而死。

江淹、あるとき荒涼とした平原をあゆんでいた。すると、蔓草が人骨にからみついているのが、ふと目にうつったのである。当時のことゆえ、こうした光景はよくあったことだろう。だが彼はそれをみるや、「ひとは最後にこうなるとおもえば、天道をあげつらってもしかたない」という悲観的な思いにとらわれ、「心驚いて已まず」、心さわいでやまなくなった、という。このように江淹は、「恨人」（多情多恨な男）であるのが自分の生地であり、

いつも小心翼々とすごしている、とみずからかたっているのである。

ただ、この発言、信じてよいのだろうか。呉興左遷期につくられた賦は、たしかに陰鬱でしめっぽいものがおおい。ただそれは、左遷や妻子の死という事情があったからであり（拙稿「江淹評伝」参照）、そうしたできごとに遭遇したならば、江淹ならずとも、おおくの者が同種の心境におちいることだろう。それゆえ、本人がこういっているだけでは、「本より恨人」、つまり生まれつき多情多恨な男だったと断じるのは、はばかられるといってよい。

すると、呉興左遷以前の賦もみておく必要があるだろう。江淹という人物の生地をしるには、やはり若年期、つまり左遷以前の作もみておかねばならない。ただ、若年期にかかれた六篇の賦（右を参照）は、主君の劉景素を諷したものなど、主題が一方面に限定されたものがおおい。すると、江淹の生地がうかがえそうなものとしては、［主君の諷刺などとは関係のない］「哀千里賦」があげられそうだ。

この賦は泰始四年（四六八）、江淹二十五歳のときの作（現存のなかでは最初の賦作品）である。彼はこの前年、危難に遭遇し、なんとかのりこえたばかりだった。すなわち、広陵で建平王劉景素につかえていた江淹だが、周辺の者から、賄賂をとったとうたがわれてしまい（江淹は濡れぎぬだと主張する）、広陵の獄中にとらわれてしまったのである。そこで江淹、思案のあげく、獄中で上書をつづり、おのが無念と窮状とを劉景素にうったえたのだった。それが名篇の「詣建平王上書」である。この名篇の力によって、文学好きだった景素の心をゆりうごかし、彼は釈放をかちとることができたのだった。そして、あけたこの泰始四年、江淹は秀才に推挙され、対策の文も合格した。かくして、巴陵王の劉休若（文帝の十九子）の右常侍にとりたてられ、仕官できることになったのである。

ときあたかも、その劉休若は、湘州の刺史に任じられた。そこで劉休若につかえるべく、江淹は同年秋、建康から湘州の地にむけて出立したのだった。この「哀千里賦」は、その湘州へむかう途上でかかれたものである。新任地へむかうわかき江淹、いったいこの賦で、どんなことを叙しているのだろうか[2]。

蕭蕭と秋風がふく漢水の南岸、そこからは荊山の峰がつづく。北のほうは琅邪や碣石の山々へつらなり、南のほうは九疑山や桂林につづいている。山やまは奇峰がつらなり、小山が漢水にそってならぶ。雑樹はたかだかとそびえ、紅霞は万里にひろがっている。

漢水の流れは、とおく空と接して、浮雲とおなじ色あいだ。茫々としてはてしなく、ひろびろとして際限がない。そこの難所は孟門のごときで、広さは黄河のごときで、ふぞろいに巨石が林立し、大亀が縦横におよいでいる。このあたりは、夏の禹王もまだ掘削せず、秦恵王も道をひらいておらぬ未開の地である。岸辺はけわしい岩石が断崖をなし、うねうねとつづく。また水の流れは、波浪がさかまき、川砂は岩石にぶちあたっている。

私はかつて［大明七年〈四六三〉の］孟冬に起家し、翌年の初夏に故郷にかえった。やがて、故郷を出立し友人らと辞別したが、それ以来ずっと故郷をしたい、友にあえぬ悲哀を感じている。［湘州へむかういまも］わが魂は一晩中かなしみつづけ、わが心はなんども悲痛するばかり。むなしく故郷を遠望して悲嘆にくれるも［この地では］友と再会できるはずもない。この無念の思いは、黄土にきざみつけておこう。

そうこうしているうち、鴻雁がないて、晩秋の陽ざしもよわまってきた。くろっぽい水のうえで、蓮の葉がゆれうごき、ふかみどりの山々のなか、木々の紅葉がかがやいている。私は［あの屈原のごとく］、雲の車にのって泫江の北へゆこうとし、霓の裳をまとって澧水の東方にむかわんとするが、無念なことに、頼り

の虞舜さまはもう逝去されているし、芳草もかれてしまっている。

悲しみがつのり憂いがふかく、なんだかせつない気分となってきた。自分は正道をあゆんできたつもりだが、なぜかゆきづまってしまった。河北の北地はさわやかな気候だが、橘柚が［湿潤の南方から北地へ］うつれぬように、自分も遠方での生活はむつかしい。あまり年をとらぬうちに、あの梁鴻のように霸陵山に隠棲したいものだ。

蕭蕭江陰兮、荊山之岑。
　北繞琅邪碣石、
　南馳九疑桂林。

山則異嶺奇峰、横嶼帶江。
　雑樹億尺、
　紅霞万里。

水則
　遠天相逼、
　茫茫無底、其中
　　険如孟門、
　　参差巨石、
　浮雲共色。
　溶溶不測。
　　豁若長河。
　　縦横亀鼉、

若乃
　夏后未鑿、
　　嶄岩生岸、
　　馳湍走浪、
　秦皇未闢、
　　迤逶成跡。
　　漂沙撃石。

伊孟冬之初立、自出国而辞友、永懐慕而抱哀。
出首夏以帰来。
魂終朝以三奪、徒望悲其何及、銘此恨於黄埃。
心一夜而九摧。

於時「鴻雁既鳴、「水黯黯兮蓮葉動、「思雲車兮沅北、「惜重華之已沒、
「秋光亦窮。「山蒼蒼兮樹色紅。「望蜺裳兮澧東。「念芳草之坐空。
既而悄愴成憂、憫默自憐。「信規行之未曠、
「知矩步之已難。
雖河北之爽塏、猶橘柚之不遷。及年歳之未晏、願匡坐於霸山。

この「哀千里賦」は、全体的にくらい雰囲気がただよう。冒頭からして、ものさびしく、また険阻な自然が、旅ゆく江淹の前にたちはだかっている。蕭蕭と秋風がふきよせるなか、奇峰や未開の地がつづき、けわしい岩石が断崖をなす。下方をみおろせば、渺茫たる漢水が横たわっているが、波浪がさかまき川砂が岩石にぶちあたる、おそろしそうな流れである。そうした景色をながめながら、彼は末尾で「自分は正道をあゆんできたつもりだが、なぜかゆきづまってしまった」と、つらそうな、そして不満そうな言を発している。

この賦、なぜこんなにくらい雰囲気をただよわせているのだろうか。それはこの賦中で、江淹みずからが説明している。すなわち、「故郷を遠望して悲嘆にくれるも［この地では］友と再会できるはずもない」からであり、「橘柚が［湿潤の南方から北地へ］うつれぬように、自分も遠方での生活はむつかしい」からなのである。つまり彼は、故郷からとおい湘州への赴任がいやだったのだろう。だから陰鬱な気分となり、こうしたくらい賦をつづっているのだとおもわれる。

じつは、彼は友人への書翰でも、おなじようなことをかたっている。それは、親友だった袁叔明こと袁炳にあてた書翰「報袁叔明書」である。この書翰は、「哀千里賦」をかいた翌年の八月（このときは、もう湘州の地から、建康の劉景素のもとにかえってきていた）にかかれたものだが、そのなかに、

ところでこの私、昨年に事情あって秀才に名をつらね［対策文を提出し］ましたが、冬の終わりになっても、［朝廷から］任官の知らせがありませんでした。まちくたびれ、焦燥にかられ、まったくやりきれませんでした。

去歳迫名茂才、冬尽不獲有報、引領於邑、情詎可及。

という一節がある。これによると、泰始四年の江淹は、地方王（劉休若）からの招聘でなく、朝廷からのお召し、つまり建康での任官を期待していたようだ。それなのに冬の終わり（もう建康をたって、湘州にむかっていたはずだ）になっても、朝廷からの知らせがなかったので、そうとうやきもきしたのだろう。

とすると、江淹が、この賦中でくらい雰囲気をただよわせていたのは、こうした希望ちがいの任地だったからだとおもわれる。江淹はいやいや湘州にむかい、そしてこの賦をかいた時点では、荊州の荊山あたりまでいたっていた。もはや、自分には朝廷からのお召しはこないだろう（じっさい、こなかった）。ああ、自分はなぜ、友人もおらぬ、辺鄙なところへゆかねばならぬのか。江淹はこうおもって、賦の末尾で「あまり年をとらぬうちに、あの梁鴻のように霸陵山に隠棲したいものだ」などと、悲観的なことをいっているのだろう。

なお、末尾の「隠棲したい」に注目すれば、このときの江淹は、隠逸希望をもっていた、というふうに解することもできるかもしれない。ただ、この語句は、そうしたふかい思想性を有したものではあるまい。当時の人びとは、なにか不都合なことがあって、「ああ、いやだ」「ざんねんだ」などとおもったとき、つい「隠棲したい」「仙境にゆきたい」などとつづってしまいがちだった。ここの字句も、その種のちょっとしたグチ程度のものだろう。この前後の江淹の言動をみれば、このときの彼（野心まんまんの若者だ）が真摯な隠逸希望をもっていたなど、とうていかんがえられない。それゆえ、この種の発言には、あまりこだわることなく、「また、いつもの

グチをいっているな」と、かるくながしておけばよかろう。

ところで、この賦中にみえる陰鬱な心情、客観的にみると、すこしふしぎな気がする。この一、二年の江淹は、上書によって獄中から釈放された。そして秀才に推挙され、対策に及第できた。さらに湘州への任官がきまった――と、めでたい続きの日々だった。だから、「自分は運がよかった。上昇気流にものれたし、さあこれからだ」と、むしろよろこんでしかるべきだろう。

かりに、任官したさきが、［希望せぬ］辺鄙な地だったとしても、もともとが寒門出身の江淹である。それほどおちぶれた、というわけでもない。くわえてこのときの彼は、まだ二十五歳の若者だ。「心機一転、さあ、新天地でがんばろう」と、はりきってもよさそうなものである。それなのに、「友人とあえぬから、遠地赴任はいや。ああ、隠棲してしまいたい」というのは、すこしわがままではなかろうか。すくなくとも、私などはそうおもう。

とはいえ、江淹はかかる現状をつらいと感じ、こうした陰鬱な賦をつくったのだった。私見によれば、こうしたところが、彼が「本より恨人なり」と「恨人」（多情多恨な男）を自認するゆえんなのだろう。もし楽観的な男だったら、地方王からの招聘であっても、「ああ、就職できてよかった」とよろこんでいたはずだ。だが、江淹はちがった。「あんな辺鄙なところはいや。ああ、隠棲してしまいたい」となげき、グチってしまうのである。そうした、いつも悲観的でウジウジし、陰鬱な詩文をつくってしまう性格――これが、江淹の生地（高橋和巳氏であれば、感傷癖と称したかもしれない）だったのだろう。その意味で、彼の詩文が陰鬱でしめっぽくなりがちだったのは、一義的には、彼の恨人ふう性格に原因があったとしてよいであろう。

ただ、かかる恨人ふう性格は、詩人としては、わるいものではなかった。天稟にめぐまれた彼は、そうしたウ

ジウジした思いを、そのまま陰鬱な詩文に結晶させるのが、たいへんうまかったからである（逆に、あかるく楽観的な詩文は、あまり得意としなかったろう）。結果的には、それが江淹をして、感傷詩人として文学史に名をきざませたのだった。

そうした感傷詩人の資質が、よくあらわれた一例として、「望荊山」と題された詩をみてみよう。この詩は「哀千里賦」と、ときと場所をおなじくしてつくられた詩である（「荊山」の地名は、「哀千里賦」にもでてきた）。『文選』にも採録され、江淹の傑作のひとつとされるものだ。

奉義至江漢　王（劉休若）の義をしたって　この江漢の地までやってき
始知楚塞長　はじめて楚の要塞の長大さをしった
南関繞桐栢　南方の要衝は桐栢山にかこまれ
西嶽出魯陽　西の守りとして魯陽山がそびえたつ
寒郊無留影　ここ荊山周辺の寒郊には　なんの人影もなく
秋日懸清光　秋日がきよらかな光をはなつだけ
悲風撓重林　悲風が密林をごうごうとゆらし
雲霞肅川漲　雲霞は川波をあかくそめている
歳晏君如何　歳末をむかえたが　私はいったいどうしたものか
零涙染衣裳　涙がこぼれて衣服をぬらすばかり
玉柱空掩露　琴柱は露にぬれてしまい
金樽坐含霜　酒樽もすっかり霜におおわれてしまった

一聞苦寒奏　このとき　苦寒行の調べを耳にしたなら
再使艶歌傷　艶歌行をきいても　かなしむだけだろう

この詩は、「荊山」をのぞみみた、感慨を叙したものである。前半（「雲霞」句まで）は荊山周辺の秋景を叙しており、後半（「歳晏」句から）では旅のわびしさを感傷的にうたっている。一読して、「哀千里賦」とよく似た情趣を有しているのが、すぐよみとれよう。とくに、

寒郊に留影無く　秋日は清光を懸けたり

の二句は、晩秋の気配をたくみにうつしとったもので、なかなか秀逸だといってよい。おそらく、彼のごとき恨人は、なにか情趣ある景物を目にするや、すぐ「恨」の感性が発動してくるのだろう。そして、心中にわきでてきた感傷的な思いを、サッと詩句に昇華することができるのである。

清の沈徳潜『古詩源』巻十三は、この「望荊山」を「蕭瑟なり」と評している。ものさみしい感じがする、ということだ。私見によれば、この詩は、［「哀千里賦」とちがって］故郷の友とあえなくてさみしいとか、こんな遠方まできてしまったとか、説明的な字句がないのがよい。だからよむ者の心に、「蕭瑟」ふう情緒が、ふかぶかと感じられてくるのだろう。もし詩中に、現実的なグチをかきこんでいたら、読者は「なんだ、この男。そんなつまらぬことでクヨクヨしていたのか」と、しらけてしまったにちがいない。

以上、江淹の若年期を代表させて、「哀千里賦」［と「望荊山」詩と］をみてきた。これによって、彼の恨人ふう性格は、わかいころから存していたことがわかった。つまり、自身が「本より恨人にして、心驚いて已まず」というとおり、江淹はうまれつき、そしてわかいころから、多情多恨な男だったのである。その陰鬱でしめっぽい作風も、彼のうまれながらの生地が、そのまま反映したものだったといってよかろう。

三　楚辞ごのみ

ところで、右の「哀千里賦」で注目したいことが、もうひとつある。それは、文中に『楚辞』の典故をあちこちに利用していることである。たとえば一例をしめすと、

私は［あの屈原のごとく］、雲の車にのって沅江の北へゆこうとし、霓の裳をまとって澧水の東方にむかわんとするが、無念なことに、頼りの虞舜さまはもう逝去されているし、芳草もかれてしまっている。……河北の北地はさわやかな気候だが、橘柚が［湿潤の南方から北地へ］うつれぬように、自分も遠方での生活はむつかしい。あまり年をとらぬうちに、あの梁鴻のように霸陵山に隠棲したいものだ。

「思雲車兮沅北、「惜重華之已没、
「望蜺裳兮澧東。「念芳草之坐空。
……雖河北之爽塏、猶橘柚之不遷。及年歳之未晏、願匡坐於霸山。

がそれである。ここに利用された『楚辞』の典拠を、『江文通集校注』によってしめすと、つぎのとおりである。

○［離騒］沅湘を濟りて以て南征し、重華に就いて詞を陳ぶ。
○［九歌東君］青雲の衣あり白霓の裳あり、長矢を挙げて天狼を射る。
○［招隠士］王孫遊んで帰らず、芳草生じて萋萋たり。
○［橘頌］后皇の嘉樹、橘徠り服す。命を受けて遷らず、南国に生ず。
○［離騒］年歳の未だ晏からず、時も亦た猶お其れ未だ央きざるに及べ。

かくみると、江淹は、『楚辞』の典故を多用しながら、自分の思いをかたっているようだ。こうした多用は、

いま自分がいる場所が、屈原の故国だった楚にちかいことも、理由のひとつだろうが、やはりこのときの江淹には、心情的に『楚辞』や屈原にちかい気分があったのだろう。

私見によれば、江淹の恨人ふう性格は、『楚辞』、なかでもおのが鬱屈をつよくぶちまける屈原の文学に、シンパシーを感じることがおおかったとおもわれる。たとえば、このときの［希望せぬ］湘州行き、これは、江淹には「あの屈原の、国外追放とそっくりじゃないか」とおもわれたのではないか。自分は、すぐれた資質をもった男である。それなのに繁華な建康や京口をおわれ、辺鄙な湘州にゆかされている。なんと無念なことか。ああ、自分は、あの屈原とおなじ憂きめにあっているなあ、と。そうしたところが、この「哀千里賦」をいっそう陰鬱なものにしているといってよい。

ただし、この時期の楚辞共感は、それほど深甚なものでなく、まだおおらかで、余裕のあるものであった。そもそも、この「哀千里賦」の場合、湘州にゆかされているといっても、左遷ではないし、いわんや［屈原のような］国外追放などではありえない。むしろ客観的にみれば、仕官できたのだから、よろこんでもよいぐらいのものだ。その意味で、このときの彼が『楚辞』や屈原の文学にシンパシーを感じたとしても、まだおおらかなものであって、［のちの呉興時代の賦にみえるような］屈原の悲劇やヒロイズムなど、先鋭的なものへのそれではない。

そうしたおおらかな楚辞共感がみうけられる賦を、もう一篇あげてみよう。それは、このときの不本意な湘州赴任から、六年後にかかれた「燈賦」である。

この「燈賦」は、［すでに指摘があるように］当時つかえていた建平王劉景素を、諷諫しようとしてつくったものらしい。景素はこの時期、暴虐な後廃帝が人心をうしなっているのをみるや、挙兵して現今の君臣を廃して、

自身が帝位につこうと企図していた。江淹はその企てをしり、この賦をつくって謀叛をおもいとどまらせようとしたのだった。するとこの賦の創作時期は、おそらく元徽二年（四七四）、江淹三十一歳のころだとしてよかろう。[3]

淮南王はたいへん派手好みだったので、宮女に命じて、［高価な］丹砂を服食させたり、鳳音の吹奏をまなばせたりしていた。ある日のこと、紫色の霞がきえ、日もくれてきたので、宮殿の壁に明燈をかけさせ、暗闇をはらいのけようとした。そのとき小山儒士のほうをみて、「そなたは、この燈を賦にすることができるかな」といった。そこで小山は瑟をひきながら、つぎのような賦をつくったのである。

さても、大王の燈は、銅の光沢と金の台からなり、ともに模様や彫刻でかざられています。また碧石が雲のかたち、美玉は仙人のかたちに、それぞれ象嵌されております。［燈の油をためた］両盤から火芯が百出して、帷帳をてらし庭中をあかるくします。また錦地の座席をてらし、刺繍された琴柱の箏を映じています。その燈の明かりは、大王の気分を自在にときはなち、心中の惑いもときほぐしてくれるのです。これぞ諸侯王のご自慢の燈であり、寒士どもはとても所有できません。

いっぽう、庶民の燈は、銀製でも珠製でもなく、飾りも模様もございません。美しさなどはもとめず、ただ実用一点張りです。ですから、秋に露が帷幔をひやし、風が衣服にふきよせるや、螢は桂樹とわかれ［て庶民の室内にはいり］ますし、蛾は蘭油で命をおえます。秋の夜は一年のごとくながく感じられ、秋の思いは糸のようにつきることがありません。そうした思いにつきまとわれ、この秋の時期をかなしむのです。こうしたとき庶民たちは、きっと燈の下で悲嘆にくれ、いうべきことばもわすれてしまうことでしょう。

やがて、霜が庭の橘樹をこおらせ、冰が水菖蒲をからせ、雪空がどこまでもつづき、河海もくらくなりま

す。冬の夜に燈油がこりかたまり、［時をはかる］漏箭もうごかなくなりますと、彼らはさむざむとした心持ちとなり、冬の夕暮れにさみしい気分におそわれるのです。

かくみると、朱燈があかるいのは、ただ大王をかがやかすためなのです。だからこそ、燈は宝というべきものであり、賦をつくることができるとおもったのです。

淮南王は、小山が朗誦したこの「燈賦」をきくや、「よし」と称賛した。そして、じっくりかんがえてから、つぎのようにいった。

屈原は才能すぐれし人物だったし、宋玉もりっぱな男だった。私は彼らとおなじ時代にうまれ、親密に交際できなかったのが残念じゃ。

ところがいま、そなたは［彼らにおとらぬ］才腕ぶりをほこっていて、私の［そなたへの］親近ぶりは、他の臣僚よりたかいものがある。そなたは、蘅や蕙のごときかぐわしい言論をなし、瓊や珉のごときうるわしい品行をたもっておるな。［私が有する］豪華な車馬というものは、そなたのような愛国の士にさずけるためにあるのじゃ。

淮南王信自華淫、命彩女兮、餌丹砂而学鳳音。
「紫霞沒、「掛明燈、
「白日沈。「散玄陰。

顧謂小山儒士、斯可賦乎。於是泛瑟而言曰、

若大王之燈者、
「銅華金檠、「碧為雲気、
「錯質鏤形、「玉為仙霊、

双碗百枝、艶帳充庭、
　昭錦地之文席、
　　恣霊修之浩蕩、茲侯服之誇詡、而処士所莫営也。
　　映繡柱之明筝、
　　釈心疑而未平、
若庶人之燈者、
　非銀非珠、心不貴麗、器窮於朴。
　　無藻無縟、
是以
　露冷帷幔、
　　螢光別桂、
　　秋夜如歳、
　　怨此懐抱、必丹燈坐嘆、停説忘辞。
　風結羅紈。
　　蛾命辞蘭。
　　秋情如絲。
　　傷此秋期、
至夫
　霜封園橘、
　　雲雪無際、
　　冬膏既凝、
　　涓連冬心、
　冰裂池蓀、
　　河海方昏、
　　冬箭未度、
　　寂歴冬暮。
亦復朱燈空明、但為君故。乃知燈之為宝、信可賦也。
王遂賛善、澄意斂神。
　屈原才華、恨不得与之同時、結佩其紳。今子凝章挺秀、近出嘉賓。
　宋玉英人、
　吐衒吐蕙、璀驂雕輦、以愛国之有臣焉。
　含瓊含珉。

この「燈賦」、一読すれば、すぐ宋玉「風賦」の模擬作であることがわかろう。モデルとなった「風賦」を紹介すれば、楚襄王が、宋玉らとともに離宮で避暑しようとしたとき、さっとここちよい涼風がふいてきた。王が「この風は庶民と共有するものじゃな」というと、宋玉は、いやそうでなく、これは王だけの風だという。そして風の賦をつくって、「ここちよい風は、王だけにふく雄風ですが、湿気をもたらし病を生じさせる風は、庶民

にふく雌風でございます」とかたったのである。いうこころは、宋玉、表面では楚襄王の偉大さを称賛しつつも、じつは［庶民をいたわらぬ］贅沢ぶりを諷しようとしたのだ――というものである。

では、これを模した江淹「燈賦」は、どうした諷刺を意図したのだろうか。両賦を対応させてみると、「燈賦」の趣旨は、劉景素の贅沢ぶりを諷することにあったようにみえる（淮南王＝楚襄王＝景素）。しかし、景素は質素な人がらであって、彼への贅沢批判はあたっていない。かくみると、ヒントはこの賦にでてくる淮南王だろう。この淮南王こと劉安は、前漢の皇族だったが、漢室への謀叛を企図し、けっきょく露顕して自害を余儀なくされた人物である。すると、現今の景素を擬するのに、まさにふさわしい。つまり「燈賦」は、賦中の「淮南王」を景素に、「小山」を自分（＝江淹）に擬して、景素の謀叛をおもいとどまらせようとしているのだろう（『江文通校注』二九八頁）。

すると、この賦の贅沢批判は、いわば目くらましのごときものであり、江淹はあえて諷刺の趣旨をずらして、景素を刺激しないようにしたのだとおもわれる。真の諷刺はもちろん、「淮南王劉安の二の舞をふまぬよう、宋廷への謀叛をおもいとどまってほしい」ということだったのだろう。このように江淹は、たいへん苦心して諷意をつたえようとしたようだが、いっぽうで、謀叛に失敗した淮南王を景素に擬した設定や、彼を派手好みだ（淮南王信自華淫）とした記述などは、景素に不快な思いをさせたかもしれない。

ところで、この賦で注目したいのは、末尾ちかくの発言である。ここで江淹は、淮南王の口をかりて、

屈原は才能すぐれし人物だったし、宋玉もりっぱな男だった。私は彼らとおなじ時代にうまれ、親密な交際をできなかったのが残念じゃ。

とかたらせている。なぜ、ここで屈原と宋玉とを引きあいにだし、彼らを称賛したのだろうか。

それは、すぐ了解できることである。この「燈賦」は、小山が淮南王の贅沢ぶりを諷したので、それに気づいた淮南王は、自分に忠告してくれた小山を「よし」とほめた――という設定でかかれている。すると、小山をほめた関係から、そのモデルとなった［「風賦」作者の］宋玉、さらにその師の屈原を想起し、それぞれ「すぐれし人物だった」「りっぱな男だった」とたたえたのだろう。

だが、そうではあっても、ここは諷した小山だけをたたえればよく、わざわざ宋玉と屈原とを引きあいにだす必要はなかったはずだ。あるいは諷諫した古人を称賛するのだったら、たとえば比干や伍挙、晏嬰らをあげてもよかったろう。だが、ここであえて宋玉と屈原を提示したところに、江淹の『楚辞』への共感がからんでいるとしてよかろう。つまりここの「屈原は才能すぐれし人物だった」云々の発言は、おのれの『楚辞』（正確には屈原と宋玉）好きを示唆した資料だと、解してもよいようにおもう。

くわえて、この「燈賦」のモデルは、屈原の作でなく、その弟子だった宋玉の賦であることにも注意したい。つまり江淹は、『楚辞』の中核である屈原とか、彼が国外追放された悲劇とかでなく、いわば副次的な要素だった宋玉と、その諷諫ふうの賦とを模しているのである。このようにこの時期の江淹は、『楚辞』への共感といっても、屈原や「離騒」だけでなく、その周辺の人物や作品もふくめた、広義の楚辞文学を利用しているのに注意しよう。これが、さきにのべたおおらかな楚辞共感ということなのである。

そうしたおおらかな楚辞共感をおこなった例として、もうひとつ、やはり呉興左遷まえにつくった、「丹沙可学賦」という賦もあげておこう。この賦は、遊仙の可能なることをかたったものだが、ここでは、修行なって仙境めざして遊行する部分をあげてみよう。

そこでわが精神はひきしまって神霊のようにあがってゆき、肉体はぼんやりとして怪異な姿となった。私は、

蕨薤をあんで冠をつくり、飾り玉をはめて環珮をつくる。そして苦しみの俗世をでて上昇し、混沌たる気をぬけて天上へとびたつ。すると鳳凰が飛来して太陽をかくし、鸞鳥があつまって群をなしてきた。左方には昆吾の丘の炎暑がひろがり、右方には崦嵫の山の卿雲がただっている。

遂乃
- 気穆肅而神奔、
  - 綴蕨薤而成冠、
    - 出湎泣而遐騖、
    - 貫濛鴻而上厲。
  - 点雜錯而為珮。
- 骨窈窈而鬼怪。

- 鳳之来兮蔽日、
  - 左昆吾之炎景、
- 鸞之集兮為群。
  - 右崦嵫之卿雲。

この部分は、もちろん実写でなく幻想だろう。主人公（江淹？）は仙境めざして、天空にかけあがっている。ここで江淹は、遊仙の場面をえがくのに、『楚辞』中の遠遊描写を模しているのに注目したい。この部分で利用された『楚辞』の典拠をあげてみると、

○［遠遊］形は穆穆として以て浸く遠く、人群を離れて遁逸す。気の変に因りて遂に曾挙し、忽ち神のごとく奔り鬼のごとく怪なり。

○［九歌東君］律に応じて節に合すれば、霊は来たりて日を蔽う。

○［離騒］吾羲和に令して節を弭め、崦嵫を望んで迫る勿からしむ。

などがそうだろう。

ここでは宋玉の賦などではなく、『楚辞』の中核たる屈原の［作だと信じられていた］「離騒」や「遠遊」を利用している。ただ、そうではあっても、ここは望みかなっての遊仙をえがいたものであり、いわば気らくで心はずむ場面での『楚辞』利用であるのに注意しよう。いかにも『楚辞』らしい、屈原の［国外追放の］悲劇やヒロ

イズムを利用したものではない。

このように呉興以前においても、賦中に『楚辞』の典故や語彙を利用してはいた。だがそれは、

(1)『楚辞』の中核たる屈原ふうの悲劇志向やヒロイズムなどは、まだ濃厚ではない。

(2)屈原の作でなく、宋玉の賦のような娯楽的なものも利用している。

(3)『楚辞』以外の経書や文史関連の典拠もすくなくない。

というものなのである。江淹は、その恨人ふう性格により、『楚辞』の文学にシンパシーを感じていて、しばしば典故として利用している。だが、この時期のそれは、まだおおらかな共感であった。そのため、突出してめだつというレベルではなく、比較的めだつという程度だったといってよいであろう。

四　呉興左遷

ところがである。この「燈賦」をつくってからまもなく、江淹に悲運がおそったのだった。「燈賦」や「效阮公詩」などで劉景素を諷してきた彼は、ついに景素の怒りをこうむって、辺鄙な呉興の令に左遷させられることになったのである。

悲運は、それだけにとどまらなかった。いよいよ呉興へ出立しようかというとき、親友（袁炳）が死んだ。そして呉興令に転じた翌年には、期待していた第二子が一歳余で夭折、さらにその翌年には妻まで病死したのだった。このとき江淹は、妻子を京口において、ひとりで赴任していた。そのため妻子の死に、たちあうことができなかったのである。妻子は、人質として京口にとめおかれたのか、それとも江淹自身が、呉興の辺鄙さをあやぶ

んで、あえておいていったのかは、現在ではわからない。いずれにせよ、結果的に江淹は辺鄙な呉興の地で、妻子の死をしったのだった。

だが、冒頭でものべたように、こうした悲運が、逆に江淹の詩嚢を刺激したのだろう。この不幸な呉興左遷の時期に、彼一代の名作群、すなわち「傑作の森」がうまれてきたのだった。ここで注目したいのは、その名作のかずかずに、本稿が注目する『楚辞』とその周辺の典故が、おおらかでなく、先鋭的に利用されていることである。

典型的なものとして、彼の「去故郷賦」をあげてみよう。この賦は元徽二年（四七四）の秋、江淹が左遷先の呉興へむかう途上でつくったようだ。この賦では、『楚辞』のなかでも、楚から追放させられた屈原に、自己を擬しているのが注目される。たとえば冒頭の、

夕暮れにちかづき、日は呉山の丘にしずもうとしている。北風が草木をへしおって、紅の花々がふきとび、流水がおしよせて、緑竹がまばらになっている。わたくし淹（屈原）は、香りよい桂枝（建平王＝楚懐王）をこのむが、いまは周囲にみあたらず、月をかくす浮雲（建平王のとりまき＝楚懐王のとりまき）をきらうが、わが身は京口をはなれ、左遷（楚国追放）の途上となっている。

日色暮兮、隱呉山之丘墟。
「北風折兮絳花落、」「流水散兮翠蚕疏。」
「愛桂枝而不見、」「悵浮雲而離居。」

という部分がそうだ。「桂枝」「浮雲」「離居」などは、いずれも『楚辞』中の語（順に「離騒」、「九章悲回風」、「九歌大司命」）をつかったものであり、いかにも屈原の悲劇を連想させている。

右の冒頭部分でも「わたくし淹＝屈原」の比擬を利用していたが、賦のなかごろでも、屈原の悲劇を連想させ

る典故が多用されている。すなわち、

川の中洲をこえてから冠をぬぎ、潓浦にいたってから外套もすててしまった。蘆のさみしげなざわめきを耳にし、霜露がおりていることに気づいた。水辺にむかって憂いを感じ、海浜で歳末もちかいと感慨にふける。

「出汀洲而解冠、」「聴蒹葭之蕭瑟、」「対江皐而自憂、」「入潓浦而捐袂。」「知霜露之流滞。」「弔海浜而傷歳。」

の字句がそれだ。ここの「汀洲」（川の中洲）は、『楚辞』九歌湘夫人の「汀洲の杜若を搴りて、将に以て遠き者に遺らんとす」にもとづき、「潓浦」（湖南省をながれる河川）は、『楚辞』九章涉江の「潓浦に入りて余は儃佪し、迷いて吾の如く所を知らず」に、おなじく「捐袂」（衣をぬぎすてる）は、『楚辞』九歌湘夫人の「余が袂を江中に捐て、余が袵を醴浦に遺つ」に、それぞれ依拠した表現である。その他、「蕭瑟」や「江皐」などの語も、『楚辞』に由来するものである。

「去故郷賦」の末尾も引用してみよう。ここでは「重ねて曰く」とはじまっているが、そもそも賦末尾に「重曰」をおくことじたい、『楚辞』遠遊にはじまるものなのである。

さらにいう。江南の杜蘅（江淹＝屈原）は、色つやはおとろえても、その思いは、黄鵠の鳥によって佳人（建平王＝楚懐王）につたえてもらいたい。酒杯を横において、むなしく佳人をしたい、玉琴を奏したとて、だれにもきいてもらえぬ。高山をみると日はしずみゆき、涙がこぼれ手拭いはずぶぬれだ。物見やぐらは安定していても、やがて螻蟻とともに塵と化してしまうのがうれわしい。

重曰、江南之杜蘅兮色已陳、願使黄鵠兮報佳人。「横羽觴而淹望、」「撫玉琴兮何親。」

「瞻層山而蔽日、恐高台之易晏、与螻蟻而為塵。
流余涕以沾巾。」

ここでも、みずからを追放された屈原に擬している。そして自分（江淹）は、左遷の苦悩のなかにあっても、なお、佳人（建平王劉景素）をしたいつづけますと、暗にかたっているのだろう。江淹はもともと恨人（多情多恨な男）であり、感情ゆたかな『楚辞』の文学をこのんでいた。そうしたところに今回の左遷の苦悩がくわわって、彼の恨人ふう傾向がいよいよ助長されているのに注意しよう。

とくに、この「去故郷賦」を執筆したときは、まさに呉興への赴任途上であり、江淹は一種の興奮状態にあったのだろう。そのためか、賦中にははげしい嘆きや慟哭があふれ、なまなましい感情にとんでいる。たとえば、自身を「江南の杜蘅は、色つやはおとろえても」云々と叙する箇所などは、あたかも「自己＝追放された忠臣（屈原）」イメージに陶酔しているかのようだ。かくしてこの賦では、屈原ふうの［国外追放の］悲劇やヒロイズムを、大々的に活用するにいたったのである。

ただ、そうした事情があったためか、この「去故郷賦」、いささか不用意なところもないではない。というのは、自分を屈原になぞらえるのは、まだよい。しかし、その比擬を延長させてゆくと、江淹を呉興に左遷させた劉景素は、［英明とはいいがたい］楚の懐王ということになってしまう。するとこの賦は、読みようによっては、劉景素の言動に、批判の意をこめたものとみえなくもない。江淹の主君の景素は、なかなか賢明な人物であり、詩文にも造詣がふかかった。そうした彼がこれをよんだら、江淹の自分への忠誠心は了解したかもしれぬが、自分が楚懐王に擬せられたことには、不快な思いをもつかもしれない。このときの江淹は、そうしたことまで気がまわらなかったのだろう。

この「去故郷賦」では興奮状態にあった江淹も、やがて呉興の地に到着し、そこで令として勤務しはじめると、しだいに冷静になり、おちついてきた。あいかわらず、「つらい」「かえりたい」「かなしい」という詩文をかきつづけるものの、その文辞は慎重なものになってきたのである。

ここでは、そうした冷静になってきた時期の作として、「倡婦自悲賦」をしめしてみよう。この賦には序文がついているので、まずそれをよんで創作事情をうかがってみよう。

漢代の目録に「倡婦自悲賦」が著録されているが、その文は現存していない。私は、蕙草が風でおちるのに涙をながし、[漢代の]美人がむなしく衰老してゆくのを気の毒におもい、そこで[亡佚した賦に模して]この賦をつくってみた。

漢有其録、而亡其文。
「泣蕙草之飄落、乃為辞焉。
└憐佳人之埋暮、

これによると、漢代に「倡婦自悲賦」という賦がつくられたが、亡佚した。そこでわたくし淹は、その亡佚した賦に模して、この賦をつくってみた、ということらしい。本文をよむと、すてられた女性（ここでは漢の舞姫）の嘆きを叙しつつも、じっさいは景素（主君）に左遷された江淹（逐臣）の鬱屈を、かたったものとかんがえられる。こうした君臣関係を男女の情に比擬する叙しかたは、『楚辞』に由来する伝統的な手法である。その意味でこの賦は、構想自体を『楚辞』に負っているといってよかろう。くわえて江淹、主人公が「漢宮」にすむ女性（舞姫）なので、その関係で班倢伃「自悼賦」あたりも参照しているようだ。

つづいて、「倡婦自悲賦」の本文をみてみよう。この賦、難解な行文なので誤読おおきをおそれるが、とりあえずの訳文をしめしてみると、つぎのようである。[4]

私は趙の東からこの長安の宮殿にやってき、歌舞を演じる日々をすごしました。りっぱな房屋の墻にかこまれた道路で、桂枝のごとき私たちは軽風にのって舞をまい、また白壁の翠楼のうえで、明月が秋らしい風情をそえるなかで演舞したものです。そうしたある日、不意に歌声が停止させられ、歌姫たる私たちはどうしたことかと心配しました。

すると、なんと君王さまが私をご寵愛くださり、私たちは朝まで楽しみをつづけるようになったのです。私は、君王さまの青駕にはべって雲上をゆき、丹輦ではこばれて霞のごとくただよいました。そして、『詩』の南山のごとく、二人なかよく長寿にめぐまれ、壽陵を指さし死後の同穴をねがったものでした。

ところが、とつぜん緑衣の女が私の地位をうばい、白華の草が寝床へ侵入してきたのです。おかげでこの私は、努力してもいとおしんでもらえなくなり、黄金があってもどうでもよくなりました。

君王さまの九重はとじられ、私がすむ宮殿は荒廃するばかり。青苔がはえて銀閣はさびれ、蜘蛛の巣がはって玉梯も放置されたまま。かくして［寵愛されぬ］私は九冬をさみしくすごし、十秋も別居を余儀なくされました。そのうち、わが魂が死にちかづいたのに、骨をうめる墓地もないのが心配になってきたのです。

やがて私は、故郷にかえって余生をすごせることになりましたが、それは、君王さまから恩恵をいただけたおかげです。私は、柏梁台をさらんとして袂で顔をおおい、宮殿の桂苑を辞去しようとして眉をひそめました。朱門をふりかえると、さらなる老いを実感し、頭髪に手をやっては、その白さに一驚したほどです。

こうして［帰郷の旅についた］私は、帝城がとおざかるのをうらみ、故郷へつづく平原がとおいのをかなしみます。霜が衣におりて葭もつめたく、風が馬車にふきよせて日もかげります。御者は［故郷の］趙をしたってふりかえらず、馬は［故土の］燕をおもって休息もしません。私は、遠山の異峰をみては涙をこぼし、

浮雲のさまざまに変化する色をながめるばかり。もし鏡を私の前におけば、きっと翼をひろげてとぶ、孤雁のごときでありましょう。そこで、つぎのような詩をつくってみました。

曲台でのたのしき歌声が　まだおわらぬうちから
黄壌を棺にいれ　埋葬される心構えはできておりました
［やがて私が死ねば］玉玦も色がうすれ
羅衣にも塵がつもることでしょう
雄才の君王さまは　なんのご存念もないとは存じますが
あわれな舞姫の悲しさを　すこしでもご想像くださいませ

粤自趙東、来舞漢宮。
┌瑤序金陳、桂枝嬌風、歌声忽散、倡人復愁。
└素壁翠楼、明月使秋。
君王更衣、露色未晞。
┌侍青鑾以雲聳、┌願南山之無隙、
└夾丹輦以霞飛。└指壽陵以同帰。
俄而┌緑衣坐奪、┌屑骨不憐、┌九重已閉、┌青苔積兮銀閣渋、
└白華臥進。└擅金誰吝。└高門自蕪。└網羅生兮玉梯虚。
┌度九冬而廓処、┌傷営魂之已尽、
└経十秋以分居。└畏松柏之無余。
帰故郷之末光、実夫君之晩滋。
┌去柏梁以掩袂、┌視朱殿以再暮、
└出桂苑而斂眉。└撫巓華而一疑。

於是
┌怨帝閔之遂岨、┌霜繞衣而葭冷、┌御思趙而不顧、
└悵平原之何極。└風飄輪而景昃。└馬懐燕而未息。
┌泣遠山之異峰、若使明鏡前兮、碎孤雁之錦翼。乃為詩曰、
└望浮雲之雑色。
┌曲台歌未徙、┌玉玦帰無色、驕才雄力君何怨、徒念薄命之苦辛。
└黄壌哭已親。└羅衣會生塵。

［美人がおおい］趙から都の長安にやってきた舞姫、運よく君王にみそめられ、寵愛される日々をすごせるようになった。ところが君王の寵が、べつの女にうつってしまう。かくして舞姫、ひとり宮中で九冬と十秋をすごし、さみしく老いてゆく。やがて故郷にかえるのをゆるされると、老舞姫は帰郷の旅に出立した。故里へむかう馬車のなか、とおくの山々や空の浮雲をながめつつ、彼女は「あわれな老舞姫の悲しさを　すこしでもご想像くださいませ」とうったえた詩をつくった――というストーリーである。

この話はもちろん、江淹の現状を比擬したものだろう。趙出身のうつくしい舞姫を自身（江淹）にたとえつつ、その舞姫が君王（劉景素）にすてられ、やがて故郷（呉興）にさみしくかえってゆく――この筋だては、呉興に左遷させられた江淹の不遇の情を、よく反映したものといってよい。

ところで、この賦の比擬は、よくかんがえられたものだ。つまり、「去故郷賦」のように自分を屈原や忠臣に擬すると、あまりにも露骨であり、またヒロイックにすぎる。くわえて、景素を楚懐王に擬してしまうと、景素の不興をかう恐れもないではない。そこで江淹は「追放される忠臣＝自己」をやめ、「舞姫（＝棄婦）＝自己」にしたのだろう。すると、この賦の趣意は「こんなにすばらしい舞姫（＝江淹）、それなのに寵をうしなってし

まった（＝左遷）」というふうに変化してくる。こうしたやりかたによって、江淹は婉曲かつ間接的に、自己のみじめさを景素にうったえようとしたのだろう。その意味で、この賦には、すこしおちつき、慎重になった江淹の姿がうかがえるといってよい。

五　懐才不遇

この「倡婦自悲賦」と同種の作として、曹植「洛神賦」に模した「水上神女賦」と、麗色を叙した「麗色賦」の二篇がある。いずれも、賦中に美女がでてくるが、ともに江淹やその周辺の人びとに、擬したものとみなしてよい。ここでは、そのうちの一篇、「麗色賦」をとりあげてみよう。この賦は、麗色を有した女性（以下の訳では「麗人」と訳す」）を叙したものだが、この期の江淹文学の特徴、すなわち呉興左遷の苦悩や『楚辞』の積極的利用をあわせもつ、たいへん魅力的な作となっているように感じられる。そこでこの賦をくわしく考察し、その魅力をさぐってみよう。

この「麗色賦」は、大枠を宋玉の「招魂」（『楚辞』中の一篇）にかりている。

周知のように「招魂」は、国外追放された屈原をあわれんで、弟子の宋玉がつくったものとされる。形式的には、かんなぎの「巫陽」が、上帝の命によって［楚をさった］屈原の魂にむかって、「魂よ帰り来たれ」とよびかけたものである。［楚以外の］四方の地は、おそろしいところです。醜悪な怪物や獰猛なけだものが、ウヨウヨしておりますぞ。それに対し、楚の国には、豪壮な建物、贅沢な調度、ごちそう、美女がいっぱいで、それらがあなたのお帰りをお待ちしているのです。ですから、ぜひとも楚へお帰りください――。

江淹「麗色賦」も、この「招魂」の形式にならって、巫陽に模した「巫史」という人物を登場させている。そして、その巫史に「説」をかたらせるという手法をとって、一篇を構成しているのである。[5] 以下、分段しながら紹介してゆこう。まず冒頭は、つぎのようにはじまる。

楚臣の屈原が国外追放され、その魂は江南へさってしまった。その弟子に、宋玉という者がいたが、彼は珮をはずし馬車のそえ馬をときはなった。細雨けぶる淥水のほとりにたち、青衫はひるがえっている。そこで、宋玉は巫史をまねき、「[屈原をしたう] 私の憂いは、どうすればおさまるだろうか」とたずねたのである。

すると巫史はいった。臣は、学問がなく道理にくらい人間です。臣が存じあげているのは、ただ麗人についての「説」だけでございます。

楚臣既放、魂往江南。弟子曰玉、釈珮解驂。
「濛濛淥水、乃召巫史、茲憂何止。
「褭褭青衫。

史曰、臣膠学蔽理、臣之所知、独有麗色之説耳。

江淹は、まず宋玉をつかって、巫史に「私の憂いは、どうすればおさまるだろうか」とたずねさせる。すると巫史は、自分がしるのは麗人の「説」だけですといって、その説を宋玉にむかってかたりはじめる。その巫史がかたる「説」が、そのまま「麗色賦」の内容となるわけだ。したがってこの部分は、いわば賦本文をみちびきだすための序文（ただし、この部分も押韻している）に相当しよう。以下、「麗色賦」の実質的内容がはじまる。

[その説は、以下のようでございます。] さても、世にならぶなき女性といえば、まちがいなく臣の東鄰の麗人でありましょう。その麗人、翠鳥のごとき眉に玉のような肌、瞳はくろく唇はあかい。黄金の花飾りを

まぶした珠履をはき、綺の袂と錦の紳とをゆらしています。顔色はしろくて他人の目をうばい、容色の輝きぶりは女神のよう。その容姿が表現しがたいのに、どうして神韻さなど説明できましょう。ですから、仙草、霊葩、冰華、玉儀などでたとえるしかありません。

さて、その麗人たるや、すがたをあらわすや、あたかも紅蓮が池のなかで映じるかのよう、すこしすすみでるや、彩雲が崖からでてきたかのよう。五色の光がかがやき、十種の色がきらめきます。そのようすは、樹からひろがった珊瑚よりも貴重であり、枝をひろげる瓊樹にも相当するほどです。

玉堂の春姫や岩屋の素女ら（ともに仙女）は、海辺の煙霧をはらいのけて、河渚でその美貌を鮮明にあらわしますし、また天河をわたって、水上にただよい、帝帝の門番に声をかけて、じっとたっています。ですがそうした仙女らとて、この麗人にくらべれば顔色がなく、とうてい比較になりません。

夫絶代独立者、信東鄰之佳人。
┌既翠眉而瑤質、灑金花於珠履、颯綺袂与錦紳。
└亦盧瞳而頼唇。

┌色練練而欲奪、┌非気象之可譬、故┌仙草霊葩、
└光炎炎其若神。└奚影響而能陳。└冰華玉儀。

┌其始見也、若紅蓮鏡池。┌五光徘徊、┌宝過珊瑚同樹、
└其少進也、如彩雲出崖。└十色陸離。└価値瓊草共枝。

雖┌玉堂春姫、┌張煙霧於海際、┌乗天梁而皓盪、猶┌比之無色、
└石室素女、└耀光影於河渚。└叫帝閽而延佇。└方之非侶。

宋玉「招魂」では、屈原の魂をよびもどすために、ごちそうや調度品の贅沢さ、さらに美女や歌舞の楽しさな

どを強調していた。それに対し「麗色賦」では、標題どおり麗人の［内面、外面の］すばらしさだけに焦点をしぼり、その他のものはすべて捨象している。

江淹ははじめに、麗人を紹介してゆく。「世にならぶなき女性といえば」云々は、もちろん前漢の李延年の「北方に佳人有り、絶世にして独り立つ」をふまえ、「臣の東鄰の麗人でありましょう」云々は、宋玉「登徒子好色賦」の「天下の佳人は……臣の東家の子に若くは莫し」にもとづくものだろう。

さらに「すがたをあらわすや」云々も、やはり宋玉「神女賦」における神女登場の場面、すなわち「其の始めて来るや、耀乎として白日の初めて出でて屋梁を照らすが若く、其の少しく進むや、皎きこと明月の其の光を舒ぶるが若し」を模したのだろう。以下は略するが、江淹はおおく［宋玉の諸篇をふくむ］広義の『楚辞』を利用して、麗人の美しさをかたっている。

つづいて江淹は、いろんな場所における麗人をえがいてゆく。はじめに豪華な宮殿の居室、つづいては春夏秋冬の景色のなか、そしてめぐりゆく自然の変化をえがきつつ、そうした場にたたずむ麗人の姿を叙してゆく。

さて、その麗人のすむ華麗な宮殿が、大通りのそばにたっています。その宮室には月光がそそぎ、緑の帷帳には陽光がてりつけます。きれいな虬模様の柱がたち、また高大な虹模様の梁がよこたわっています。さらに錦のカーテンがたれてものさびしく、桂枝をもやした香煙もただよいます。そうしたなか、麗人は優美な邯鄲ふう歩みですすみ、趙女のごとき鳴瑟をひびかせています。

春になると紅華がさきだし、黄鳥がまいはじめます。紺蕙もわかわかしい芽をだし、赤蘭もさきはじめました。このとき麗人は、杜蘅の帯を手にとらず、桂旗もたてようともしません。ただよき詩句をえらび、それを吟誦しているのです。なかでも陳風の［好色を諷した］「月出」詩をよろこんで吟じ、衛風の［よき出

会いをもとめた」「野有蔓草」詩に感動しています。

さて、暑熱の気がさかんな夏至、また［夏の終わりをつげる］大火の星が出現するころ、槿の花に露がおり、蓮の花が風にゆれています。後面の手すりに沙果の花がさきほこり、前面の軒下に碧桐がしげるなか、園右から笙の音がきこえ、池東には琴の響きがみちています。そうしたなか麗人は、楚王が巫山の神女をよろこんだことに賛嘆し、漢水の二女と鄭交甫がむすばれなかったのをかなしんでいます。

太陽が西の星宿へむかって秋となり、弦月が夜空の軌道にうかぶころ、月光は門戸をてらし、玉露が空をおおうほどおりてきます。蜘蛛の糸が牆壁にかかり、螢が梁のあいだをめぐっています。空気はしめっていますが、まだ暁天とはならず、星は西にながれても、まだ夜はあけそうもありません。こうしたなか麗人は、雑珮をささげし殿方を想起しては、ずっとしたいつづけ、またともにすごした錦衾をみては心をいため、たいへんかなしむのです。

寒気が植物をからし、泉水もこおりつく冬季になると、軒にはあつく霜がおりて、庭には雪がつもります。鳥や魚もかくれ、河や海も凍結してしまいます。ですが、紫の帷幕は部屋を密閉し、翠のついたては冷気を遮断してくれます。そして蠟燭は周囲をあかるくてらし、燈爐もかさなりあって暖気をひろげてくれます。麗人は衛の宣公がつくった新台の青楼を恥だとし、上宮の［恋人と密会する］部屋に思いをいたすのです。

［こうした四季のめぐりのなか］すんだ江水は景物をうつして川底をあらわし、煙は風にのって無限にとんでゆきます。すると、霞が呉地であざやかな色を呈し、雲が趙地で碧色にわきだします。また、霧が楚地からゆらゆらただよいだし、風が燕地からふきよせ蕭々としてきます。すると、麗人は鏡もみずに徘徊したり、瑟をひいてかなしんだりするのです。

於是雕台繡戸、当衢横術。
椒庭承月、
碧幌延日。
架虬柱之厳麗、
錦幔垂而杳寂、女乃
耀邯鄲之躍歩、
亘虹梁之峻密。
桂煙起而清溢。
媚趙北之鳴瑟。
若夫
紅華舒春、
紺蕙初軟、
不攬蘅帶、
摘芳拾蕊、
笑月出於陳歌、
黄鳥飛時、
頼蘭始滋、
無倚桂旗。
含詠吐辞。
感蔓草於衛詩。
故
気炎日永、
槿栄任露、
後欄丹柰、
笙歌畹右、
嗟楚王之心悦、
離明火中、
蓮華勝風。
前軒碧桐、
琴舞池東。
怨漢女之情空。
至乃西陸始秋、白道月弦、
金波炤戸、
網絲掛牆、
玉露曖天、
彩蛩繞樑。
気已湿兮暁未半、
憶雑珮兮且一念、
星雖流兮夜何央。
憐錦衾兮以九傷。
及
沍陰凋時、
軒畳厚霜、
鳥封魚斂、
冰泉凝節、
庭澄積雪、
河凝海結。
紫帷鈐匝、
麝密周彰、
翠屏環合、
燈爐重沓。
恥新台之青楼、
想上宮之邃閣。
若乃
水炤景而見底、
霞出呉而綺章、
霧辞楚而容裔、
莫不
輟鏡徙倚、
煙尋風而無極、
雲堆趙而碧色、
風去燕而悽惻。
攬瑟心息。

豪華な居室や春夏秋冬の景色等をえがき、そのあとで、そこにたたずむ麗人の姿を叙している。こうした場での麗人、清楚かつ高雅なたたずまいを持しながら、しばしば心をいため、かなしんでいる（おそらくは江淹自身の喩。後述）のに注意しよう。かくいろんな場面での麗人を叙したあと、江淹は、その人がらや才能について、つぎのようにかたってゆく。

さてこの麗人の住居、帳には藍田の宝玉がちりばめられ、座席には蒲陶の模様がおりこまれ、建物には明月の絵、室内には浮雲の画がかかっています。麗人、春に蚕が繭をつくるや、そのまま糸につむぐことができますし、秋に梭が織機の音をならせば、さっと単衣をおりあげます。彼女の象牙の化粧箱と玉盤には、神瀝や仙丹がおさめられ、雕柱や彩瑟には、菊花や雪の模様がかざられています。そして頭髪には、翠羽の釵や緑金の飾りをさしております。

この麗人、ものをいえばかわいらしく、その動作もまことに典雅です。彼女の光輝さや艶麗さは、ときにかくれ、ときにあらわれます。気性は温柔で顔色はつややか、神気はまっすぐで容姿は卓越しています。秦にゆき趙をめぐっても、こんなひとはみつからず、楚をたずね蔡を旅しても、こんなきれいなひとはおりませぬ。

さらにこの麗人、黒髪を黒のままにとどめ、顔だちも少女のまま、また星や龍にのって御することもできるのです。そして憂いや死をわすれさせ、家や国も安泰にたもってくれます。天下第一の美女でなければ、どうしてそんなことができるはずがありましょう。

於是「帳必藍田之宝、「館図明月、
「席必蒲陶之文、「室画浮雲。

春蚕度繭、綺地応紡、秋梭鳴機、織為裘衣、
象奩瓊盤、神瀝仙丹、翠莚羽釵、
雕柱彩瑟、九華六出、緑秀金枝、
言必入媚、有光有艶、気柔色靡、経秦歴趙、既無其双。
動必応規、如合如離、神凝骨奇。尋楚訪蔡、不覿其容。
亦可駐髪還質、蠲憂忘死、保其家邦。非天下之至麗、孰能与於此哉。
驂星馭龍。

贅沢な調度品がそろっているが、そこで麗人はなまけることなく、蚕をそだて織機をあやつって、衣服をおっている。そして「ものをいえばかわいらしく、その動作もまことに典雅」「憂いや死をわすれさせ、家や国も安泰にたもってくれます」云々と、麗人のすばらしさをたたえている。それもそのはず、この麗人は「黒髪を黒のままにとどめ、顔だちも少女のまま、また星や龍にのって御することもできる」という。すると、おそらく仙女か、あるいはその能力をもっていた、ということなのだろう。

ここで、巫史の「説」はおわった。この賦のモデルの「招魂」では、屈原の魂をよびもどそうとして、巫陽が［楚以外の］醜悪さと、楚国のすばらしさとを、対比的にかたっていた。それに対し、この「麗色賦」では、宋玉の憂い（屈原が国外追放され、その魂が江南へさってしまったことへの憂い）をはらそうとして、巫史がうるわしき麗人像をかたったのだった。屈原の魂よびもどし（招魂）と宋玉の消憂（麗色賦）とでは、かなり趣旨がちがうように感じるが、おそらく巫史は、麗人の秀麗さをかたって気分転換させ、宋玉の憂いをわすれさせようとしたのだろう。

さて、つぎは最後の部分。ここで江淹は、賦をおわらせるにあたって、

宋玉はこの巫史の説をきくや、以前の憂いをわすれ、魂もさっぱりとして元気になった。そこで巫史を双珠で称賛し、合璧をあたえたのだった。そして巫史のためにほこりやチリをきよめ、ながく上客としてあつかったのだった。

宋大夫「耀影汰跡、」「賞以双珠、拂巫盪祝、永為上客。」
「縈魂灑魄、」「賜以合璧、

という結末をもってきている。ここで、ひさしぶりに宋玉が登場してくる。彼は、うるわしい麗人をかたった巫史の「説」に満足し、「以前の憂いをわすれ、魂もさっぱりとして元気になった」。つまり巫史の「説」は、宋玉の消憂に効果があったのである。そこで宋玉は、巫史にほうびをあたえ、一篇がおわったのだった。

以上、「麗色賦」のすべてを紹介した。この賦では、呉興左遷の苦悩（心をいため、かなしむ麗人（＝江淹））や『楚辞』の積極的利用（「招魂」の模擬）の特徴が、具備されていることがわかったようにおもう。その意味で、この呉興期につくるのにふさわしく、またこの期にしかつくれなかった作だといってよい。では、そうした「麗色賦」の魅力は、具体的にどのへんにあり、どのようにすぐれているのか。以下で、私見をのべてみよう。

第一に、賦中にでてくる麗人像が、じつにすばらしい。ひたすら清楚で高雅な女性としてえがかれている。この麗人、「顔色はしろく他人の目をうばい、その容色の輝きぶりは女神のよう」である。つまり、うつくしいということだろう。だが、その内面たるや、「気性は温柔で顔色はつややか、神気はまっすぐで容姿は卓越して」いる。さらに道義心がたかくて、好色を諷した「月出」詩を吟じ、よき出会いをもとめた「野有蔓草」詩に感動するという気高さももっているようだ。そのうえ、「憂いや死をわすれさせ、家や国も安泰にたもってくれ」る

ような、すばらしい能力ももっているというのである。

そうしたすばらしい女性でありながら、「雑珮をささげし殿方を想起しては、ずっとしたいつづけ、またともにすごした錦衾をみては心をいため、たいへんかなし」んでいるという。つまり、情にもあつくて、よき殿方をもとめているのである。こうした麗人をえがくことによって、江淹は、自分もこの麗人とおなじ情況であり、「殿方（劉景素）を想起しては、ずっとしたいつづけ」ているのだ、とさりげなくうったえているのだろう。

第二に、そうした麗人描写と連動して、この賦は、文中に四季のおりおりの叙景をまじえていて、たいへん文学的な行文となっている。たとえば、春をえがいては、

春になると紅華がさきだし、黄鳥がまいはじめます。紺蕙もわかわかしい芽をだし、赤蘭もさきはじめました。このとき麗人は、杜杜蘅の帯を手にとらず、桂旗もたてようともしません。ただよき詩句をえらび、それを吟誦しているのです。

と叙する。うるわしい春景色のなかで、麗人はうかれることなく、詩句をよみ吟誦しているのである。春景色と麗人とが、たがいに映発しあっているかのようだ。

また秋をえがいては、

太陽が西の星宿へむかって秋となり、弦月が夜空の軌道にうかぶころ、月光は門戸をてらし、玉露が空をおおうほどおりてきます。蜘蛛の糸が牆壁にかかり、螢が梁のあいだをめぐっています。

とある。ここは［下句もあわせよむと］怨情も存しているようだ。そのためか、秋の叙景と艶情とがあいまって、詩的な雰囲気をかもしだしている。

第三に、江淹の露骨な自己主張がおさえられ、婉曲かつ謙虚な姿勢で終始している。この賦は、「倡婦自悲賦」

とおなじく、孤独にしずむ麗人の嘆きを叙しつつ、懐才不遇（才があるのに地位にめぐまれない）の情をうったえたものだろう。そうではあるが、激した口調の「去故郷賦」や、思いいれたっぷりの「倡婦自悲賦」とくらべると、うったえのしかたは、たいへん婉曲で、おちついたものとなっている。

この時期特有の叙しかたとして、広義の『楚辞』からの語彙を多用することがあった（前出）。もちろんこの「麗色賦」でも利用しているのだが、だからといって、悲痛さを前面におしだしてはいない。「つらい」「かなしい」と声だかにうったえることなく、清楚で高雅な麗人を淡々とえがきつつ、婉曲かつおちついた物言いに終始しているのである。いわば屈原ふうの陽剛さでなく、陰柔の美を有している、といえようか。

以上、私見によりつつ、「麗色賦」の魅力をかたってみた。この賦は、『楚辞』招魂の形式をかりつつ、淡々とした叙述のなかで、おのが懐才不遇の情を示唆したものである。[6] さらに表面では、清楚で高雅な女性像をえがきながらも、その背景として四季おりおりの詩的な叙景も配しており、じつに内容豊富な作だといってよい。なかでも、賦中の冷静にして婉曲なうったえは、この時期の江淹文学にみいだしにくい特徴であり、私にはたいへんこのましく感じられるのである。

六　託物言志

さて、『楚辞』を利用した諸作をみてきたが、この呉興期の作にはまた、『楚辞』の利用ではなく、べつの手法をとって懐才不遇の情をうったえた賦もないではない。それは、詠物賦ふうの体裁をとり、ある事物を叙してゆきながら、そこにおのが心情を寓したものである。こうした叙しかたを、中国の文芸批評では、託物言志（物に

託して志を言う）と称するようだ。そうした託物言志の諸作も、江淹の才腕がよく発揮されたものだといってよい。この章では、そうした賦をみてゆこう。

託物言志の賦の典型として、「青苔賦」があげられる。この賦、標題からして詠物ふうだが、序でも、

私は、山中の岩石をけずって岩屋を住まいにしているが、そこに青苔（あおごけ）が生じてきた。その苔に、ふと心がうごいたので、この青苔の賦をつくってみた。

余鑿山楹為室、有青苔焉。意之所之、故為是作雲。

とかたっている。序でこういうからには、明確に青苔を賦した詠物賦だとしてよかろう。[7] ここで江淹は、ふと心がうごいた、すなわち「意の之（ゆ）く所あれば」とのべている。どのような「意」が、どのようにうごいて、この「青苔賦」をつくったのか、そうしたところに注意しながらよんでゆこう。[8]

ああ、青苔のしなやかなことよ。他のどんな植物にも比擬できぬほどだ。かならず閑寂なところに生じ、思案にくれ悲哀にしずんでいるかのようにみえる。

だから、この青苔はいつも［人気（ひとけ）のない］岩のうえにはえている。松や檜がこもごも陰をつくり、泉の水がそそぐところである。うつむくと谷の水がながれ、あおぐと崖がくずれそう。かく高低にはさまれ、水ばかりながれている。だから、青苔はやむなく曲折しながら上方にすすみ、また青色あざやかに下方にもひろがっている。この青苔、隠者らはその堅実さをたたえ、道士たちもその幽趣をよろこぶ。彼らは松脂を服食して登仙するをおもい、煉丹の書を奉じて神仙をしたっているからである。

水につかった青苔は、湖沼の水に鏡のように映じてつらなり、池辺の林に錦のようにひろがっている。春の水辺はあでやかで、鳥の鳴き声もうるわしい。郊外の草木は青々として陽光がかがやき、路は千里をつら

ぬいて緑草がしげる。そうしたなか、青苔は水からでてゆらゆらとし、また波の合間で浮沈をくりかえす。その姿は青色の枝のようにまっさおで、黄色の花のように黄金をちりばめている。この青苔をみんとして、梁孝王のもとに参じた客人は、馬がつかれてもたちさらず、兎園の桑つみ娘も、蚕が腹をすかせても、かえろうとしないほどだ。

高楼には廊下がめぐり、閨室には庁堂がつづく。その閨室では、萌黄色の布地がつくられ、また琴瑟の音がひびいている。戸や窓がとじられ奥はみえぬが、足音や衣擦れの音がひびき人声もきこえる。青苔は、階段に生じてあたりをあおくそめ、壁にはえて牆(かき)に青染(あおし)みをつける。春の鳥がかなしげな鳴き声をたてると、蘭の茎は紫色にかわり、秋の虫がなきだすと、蕙の実はきいろくなる。昼は昼とて、なかなか日が没せず、夜は夜とて、いつまでもあかるくならぬ。露がおりて梧楸の木がぬれるや、美人がひとりで涙をながし、なにごとかかなしんでいる。

十仞もの城壁もくずれて堀となり、万年をへた山も頂きからくずれるもの。たとえば、雄志が卓越したものや、意気軒昂たるものがそろい、錦を着た貴人が地にみち、馬の鞍の輝きも天にとどく。さらに恋する若者や江南の蓮つみ娘がおり、鄭生まれの伊達男や燕出身の美姫がたくさんいた――としよう。だが彼らとて、ある日とつぜん［城壁や山がくずれるように］その艶容をうしない、黄泉にうめられてしまうやもしれぬ。さみしいが、これはどうしようもないことで、やがて苔や蜘蛛の巣が［墓地に］はびこってくるだけ。かく蘼蕪(びぶ)の香草［のごとき人びと］が跡形もなくきえゆくのをみると、恨みの永遠につきぬことがいたましい。

こういうわけなので、人びとのいるところ、かならず感慨がおおく、感慨がおおいところ、かならず悲し

みもふかくなる。悲しみがふかければ、情緒もはげしくなるし、感慨がおおいと無念の情もおこりやすい。すると、魂魄がちぎれるがごとく、気分もおちつかなくなるのである。

あの木蘭と豫章の樹は、有用なので工匠にきられてしまった。また薜荔と靡蕪の草のほうは、よき香りのため称賛の的となっている。かくみてくると、青苔の徹底した無用ぶりはすごいものだ。私は、この青苔をみていると、どんな生きかたがよいのか、わからなくなってしまったよ。

嗟青苔之依依兮、無色類而可方。必居間而就寂、似幽意之深傷。

故其処石、則
- 松栝交陰、
- 横澗俯視、悲凹険兮、唯流水而馳騖。
- 泉雨長注、
- 崩壁仰顧。

遂能
- 崎屈上生、
- 異人貴其貞精、
- 咀松屑以高想、
- 班駁下布。
- 道士悦其迴趣。
- 奉丹経而永慕。

若其在水、則
- 鏡帯湖沼、
- 春塘秀色、
- 青郊未謝兮白日照、
- 錦匝池林。
- 陽鳥好音。
- 路貫千里兮緑草深。

乃生水而揺盪、
- 仮青條兮総翠、
- 游梁之客、徒馬疲而不能去、

遂出波而沈淫、
- 借黄花兮舒金。
- 兔園之女、雖蚕飢而不自禁。

至於
- 修台広廡、
- 流黄以織、
- 戸牖秘兮不可見、乃
- 蕪階翠地、
- 繞壁点牆。

幽閣閑楹、
- 琴瑟且鳴。
- 履袂動兮覚人声。

春禽悲兮蘭茎紫、
- 晝遙遙而不暮、零露下兮在梧楸、有美一人兮欷以傷。

秋蟲金兮蕙実黄。
- 夜永永以空長。

若乃
┌崩隍十仞、当其┌志力雄俊、┌錦衣被地、┌淇上相送、┌妖童出鄭、
└毀塚万年、　└才図驕堅、└鞍馬耀天、└江南採蓮、└美女生燕、
而頓死艶気於一旦、埋玉玦於窮泉。
寂兮如何、苔積網羅。視青藁之杳杳、痛百代兮恨多。
故其┌所詣必感、┌哀以情起、┌魂慮断絶、
└所感必哀、└感以怨来、└情念徘徊者也。
┌彼木蘭与豫章、既中繩而獲夭、至哉青苔之無用、吾孰知其多少。
└及薜荔与蘼蕪、又懐芬而見表。

この賦でまず注目したいことは、江淹はこの青苔なる植物を、ひどくさみしいものとして叙していることである。まず賦の冒頭で、江淹は、

ああ、青苔のしなやかなことよ。他のどんな植物にも比擬できぬほどだ。かならず閑寂なところに生じ、思案にくれ悲哀にしずんでいるかのようにみえる。

という。青苔は苔の一種なので、たしかに、うすぐらい場所にひっそりと生じる。ただそれを「思案にくれ悲哀にしずんでいるかのよう」と擬人ふうに叙するのは、なんらかの意図があったはずである。江淹はたぶん、うすぐらい場所にひっそりはえる青苔を、呉興に左遷された自分のようだとおもったのだろう。だからこそ、青苔のありかたを叙しながら、自分の思いを寓しようとしたのだとおもわれる。

以下では、ときに江淹、ときに青苔の視点から、さまざまのものをさまざまなふうに叙してゆく。

まず青苔は、岩のうえや水辺に生じているという。色あざやかで、幽趣ゆたかな風情である。それゆえ、「こ

の青苔をみんとして、梁孝王のもとに参じた客人は、馬がつかれてもたちさらず、兎園の桑つみ娘も、蚕が腹をすかせても、かえろうとしない」。これは、都邑から左遷されてきた江淹が、呉興の人びとから、珍奇なものとして注視されていることを暗示するのだろうか。

いっぽう、貴人や若者たちのほう。彼らは雄志をいだき、意気軒昂だったが、「ある日とつぜんその艶容をうしない、黄泉にうめられてしまうやもしれぬ」。だが、「これはどうしようもないことで、やがて苔や蜘蛛の巣が[墓地に]はびこってくるだけ」。かくして江淹は、「恨みの永遠につきぬことがいたましい」とかたるのである。こうした発言は、彼の代表作、「恨賦」や「別賦」の一節を想起させるものといえよう。

かく悲観的なことばをかたったあと、末尾では、ひとの生きかたについて思考をふかめてゆく。江淹は、喬木ゆえ工匠にきられてしまう生きかた（『荘子』逍遙遊による）と、香草ゆえ人びとからたたえられる生きかたとを、対比的にあげている。そしてそのあと、第三の生きかたとして、「青苔の徹底した無用ぶりはすごいものだ。私は、この青苔をみていると、どんな生きかたがよいのか、わからなくなってしまったよ」とかたっている。

ここでは江淹、どんな生きかたがよいのか、わからなくなったというだけで、どれがよいとは断じていない。ただ、じっさいの彼は、いやもおうもなく青苔ふう生きかたを余儀なくされており、呉興の地で無用のものとして存在しているだけだ。そうした生きかたを、「それでいいのだ」と達観しているわけでなく、どんな生きかたがよいのかと、まよったままなのである。おそらく、これが当時の江淹の、正直な思いだったのだろう。

このときの江淹は、辺地にとばされたこっぱ役人にすぎない。青苔のごとく、うすぐらい場所にひっそりと生じ、「思案にくれ悲哀にしずんでいる」、それが彼のにがい自己認識だったのだろう。とすれば、この「青苔賦」は、ひっそりいきる青苔の生態に託しつつ、懐才不遇の情をかみしめる自己のありようを、たくみに寓したもの

と評してよいであろう。

同時期の、そして同種の作として、もう一篇「石劫賦」もあげてみよう。序文によると、標題の「石劫（せきごう）」とは貝類で、はまぐりの仲間だという。江淹はその海中にすむ石劫をとりあげて、この賦をつくったのである。序文もあわせ、訳文をしめしてみよう。(9)

［序文］海沿いにすむ人びとには、石劫をたべる者がいる。この石劫なるものは、一名を紫蘈ともいい、蚌蛤の仲間である。この生き物は、［貝なのに］春になると花をさかせるなど、ふしぎなところがある。私はたわむれに、この石劫を題材にして短賦をつくってみた。

［本文］私は海神の臣下で、海のなかではそれなりの地位におります。天地の炉のなかで物として鋳造され、化育されて石劫となりました。私は、豹のように山林にかくれひそんで、とらわれる心配がなく、蚌蛤のなかの珠のように、やすらかに日々をすごしています。そして湖の波濤が私の形跡をかくし、洲の渚が私のすがたを水中に没してくれるようねがっております。

ですから、私がうごきまわる場所は、左方は委羽、右方は窮髪といった辺地ばかりです。太陽が東からのぼってくると、日がさすのを水中でみつめ、夕方に山岳が暗闇のなかに没すると、波のあいだから顔をだします。おのが輝きをかくし、わからぬようにし、知恵も暗黒にひそませ、はたらかせないのです。我ながらなんと薄幸にして、はかない運命なのでしょうか。

ああ、どうかこの私を、辺鄙な海沿いにすむ連中からすくいだし、公子の賓客にしてくださいますように。もし公子の玉盤のうえにの［ってご賞味さ］れるのでしたら、この私、風雨にさらされることなど、まったく苦にはおもいません。

海人有食石劫、一名紫蠆、蚌蛤類也。春而発華、有足異者。戯書為短賦。

我海若之小臣、具品色於滄溟。
　既爐天而鑄物、
　　亦翕化而染霊。
　比文豹而無恤、
　　方蚌蛤而自寧。
　冀湖濤之蔽跡、
　　願洲渚以淪形。

故其所巡、
　左委羽、
　　右窮髪。
　日照水而東升、
　　山出波而隠沒。
　光避伏而不耀、
　　智埋冥而難発。

已矣哉、請
　去海人之仄陋、
　　充公子之嘉客。

序文で「戯れて書して短賦を為る」というように、擬人法をつかった、ややユーモラスな作である。擬人化された石劫、まず本文の冒頭で自己紹介をしている。自分は海神の臣下で、海のなかではそれなりの地位にいるのだ、と自慢している。それにつづく「天地の炉のなかで物として鋳造され、化育されて石劫となりました」の言いかたは、あえて大仰な言いかたをして、諧謔味をだそうとしたのだろう。

ところがこの石劫、じつは、たいへんなさけない日々をすごしている。貝の仲間なので、湖や中洲のなかにかくれひそみ、「太陽が東からのぼってくると、日がさすのを水中でみつめ、夕方に山岳が暗闇のなかに没すると、波のあいだから顔をだ」すだけ。そして「おのが輝きをかくし、わからぬようにし、知恵も暗黒にひそませ、はたらかせない」のだという。石劫はこうした自分の生きかたを、「我ながらなんと薄幸にして、はかない運命なのでしょうか」となげくのである。

そして、末尾では、あわれな石劫の願いを叙している。それは、「辺鄙な海沿いにすむ連中からすくいだし、公子の賓客にして」もらうことだという。そして、石劫に「公子の玉盤のうえにの［ってご賞味さ］れるのでし

たら、この私、風雨にさらされることなど、まったく苦にはおもいません」といわせて、一篇をむすんでいるのである。

このようにこの賦、表面はユーモラスだが、裏では石劫の生きかたをあわれんだものである。例によって、この石劫も、「青苔賦」の青苔とどうよう江淹自身を暗示したものであり、「石劫＝［呉興に左遷された］あわれな自分」とみなしてよい。その意味でこの両篇、ともに懐才不遇の情を寓した、託物言志の賦だと解してよいであろう。

七　四時への託物

以上、託物言志の賦として、「青苔賦」と「石劫賦」の二篇をみてきた。さきにみた「倡婦自悲賦」や「麗色賦」は主人公がひとだったが、これらの賦では、ひと以外の青苔や石劫なので、その寓意も、よけいに遠まわしで婉曲なものになりやすい。それかあらぬか、この種の託物言志の賦は、直截におのが志望を表明しにくい寒門文人には、都合のよいものだったようだ。たとえば、江淹とおなじ寒門の出身だった鮑照も、こうした詠物ふうの賦を得意にしていた。彼の「園葵賦」や「野鵞賦」などは、いまみた「青苔賦」「石劫賦」と同種の託物言志ふうの作なのである。

さて、こうした託物言志をおこなった江淹の賦として、もう一篇、いささか趣（おもむき）がことなるものも紹介してみよう。それは「四時賦」と題された賦である。

ここでいう四時とは、四季のこと。したがって「四時賦」は、四季のめぐりを叙した賦ということになる。[10] そ

うしたものを、詠物の賦とみなしてよいかは、疑問のあるところである。ただ、この賦は当時の江淹の心情をよくあらわしたものであり、紹介しないでおくのはもったいない。それゆえ、とりあえず四季も物だとみなし、ここでとりあげることにしよう。[11]

北方からの旅人である私は、いつもすすりなき、深山の岩屋でさびしい日々をすごしている。[妻のおらぬ] 寝台でぐずぐずし、陋屋でくすぶってばかりいると、蜘蛛の糸が門戸をおおい、青苔が梁にはえてくるしまつ。春の花があでやかでも心はうつろ、秋の陽ざしがさしてもむなしいだけ。飛鳥をみてもわが魂は元気がでてこず、浮雲をみてもわが思いはふかまるばかり。時節がかわると感慨がおおくなり、四季がめぐると心がいたんでくる。

春、朝日があがり温暖になると、蕙草も繁茂し [かりとって] 織れるほどになり、庭の桃の花もあかづいて、川のあおい流れもあざやかになってきた。すると私は、旧都（建康）をおもって心がちぎれそうになるし、友を想起してたまらない気分になってくる。

夏、炎のごとき雲が峰からわきだし、芳樹はまだまだ元気なまま。沢蘭が坂にはえ、朱荷は池から顔をだす。すると京師のきれいだった樹木をおもいだし、建康の蕙の枝を想起してしまう。

秋、涼風がふきだすと、白露がまるい玉をむすぶ。明月が川波のうえにのぼり、螢火が寒さをむかえんとするなか、庭中の梧桐（息子）の樹をながめたり、また織機のうえの細絹（妻）に思いをはせたりする。

冬、北地ではくもりがちで、夜もなかなかあけないことだろう。[ここ呉興の地では] 平原はずっと海までせまり、千里のかなたまで渡り鳥がとんでゆく。すると、帝城の道路を夢にみたり、建康の楼台や湖沼をおもいだしたりせずにはおられない。

そういうわけで私は［四季のおりふし］、琴をつまびくといろんな感情がおしよせ、その響きについ涙をもよおしてしまう。夜がふけるにしたがって気分はおちこんでき、日が移動するごとに身体もよわまってくる。そもそも、秦人は秦の歌をうたい、楚語をはなすひとは楚の楽を奏するもの。彼らは、自国の歌をきいては涙をこぼし、自国の歌手をみては憂いにとらわれる。魂がちりぢりにくだけ、だれもすくいようがないので、そうなるのだ。人びとがかく四季の変化にたえがたい思いを感じるとすれば、私ごときつまらぬ男がそうなるのも、しかたないことではないか。

北客長欷、深壁寂思。
┌空床連流、┌網絲蔽戸、
└圭窬淹滞、└青苔繞樑。

┌春華虚艶、┌臨飛鳥而魄絶、┌測代序而饒感、
└秋日徒光、└視浮雲而意長。└知四時之足傷。

若乃┌旭日始暖、┌園桃紅点、┌思旧都兮心断、
└蕙草可織。└流水碧色。└憐故人兮無極。

至若炎雲峰起、芳樹未移。┌皋蘭生坂、┌憶上国之綺樹、
└朱荷出池。└想金陵之蕙枝。

及夫秋風一至、白露団団。┌明月生波、┌眷庭中之梧桐、
└螢火迎寒。└念機上之羅紈。

至於冬陰北辺、永夜不曉。平蕪際海、千里飛鳥。何嘗不┌夢帝城之阡陌、
└憶故都之台沼。

是以
┌ 軫琴情動、┌ 逐長夜而心殞、故┌ 秦人秦声、┌ 聞歌更泣、
└ 戛瑟涕落。└ 隨白日而形削。└ 楚音楚奏、└ 見悲已疚、
実由
┌ 魂気愴断、参四時而皆難、況僕人之末陋也。
└ 外物非救。

この賦、季節の移り変わりを叙したものだが、四季の風物を叙することは目的ではないようだ。むしろ北帰の情をうったえようとしているのだろう。

まず冒頭では、あたかも自己紹介するかのように、北方からの旅人である私（江淹）は、妻のおらぬ寝台でぐずぐずし、陋屋でくすぶってばかりいる、と説明している。ただそうした私でも、時節の変化には心をうごかされるといって、以下、季節のめぐりを叙してゆく。

つづく「若乃旭日始暖春」（朝日があがり温暖になると、の意）以下の部分は、単純な四季の叙景ではない。春夏秋冬ともすべて、

四季の叙景（四句）＋北帰の情（二句）

という構成となっているのに注意しよう。はじめ四句では、四季おりおりの景色を叙しているのだが、つづく二句では、彼の思いは［みえぬ］建康にむかっているのである。

さらに『江淹集校注』等によると、秋季の「眷庭中之梧桐」句（庭中の梧桐の樹をながめる、の意）の「梧桐」は、音通で「吾童」（わが息子）を意味し、「念機上之羅紈」句（織機のうえの細絹に思いをはせる、の意）の「羅紈」は、江淹の妻をさすのだという。このようにこの時期の江淹は、眼前の風物をみやりながらも、じっさいは北帰を切望していて、心ここにあらずという心境だったのだろう。

末尾では、［この賦の主題というべき］北帰の情を明確にかたっている。異郷にいる人びとは、自国の歌をきいては涙をこぼし、自国の奏者をみては憂いにとらわれるもの。人びとがかく四季の変化にたえがたい思いを感じるとすれば、私ごときつまらぬ男が北帰をねがうのも、しかたがないことではないか、という。最後の「私ごとき」云々の部分は、例によって「自分は恨人だから」といいたいのだろう。

このようにこの「四時賦」は、いっけん四季の変化を叙しているようにみえるが、けっきょくのところは、「建康にかえりたい」とうったえているのである。とすれば、これも「物（四季の風物）に託して志（北帰したい）を言う」もの、すなわち託物言志の賦であると解してよかろう。

八　感傷の人

以上、呉興時代の賦作をみわたしてきた。このように、江淹三十代前半の不遇の時期には、もともとの恨人ふう性格にくわえ、左遷されたことへの苦悩や『楚辞』の積極的利用、さらに託物言志の活用など、各種の要因や手法があいまって、おおくの傑作がかかれた。その主要なテーマは、「［左遷されて］つらい」「［建康に］かえりたい」「［妻／子／親友の死が］かなしい」というもので、まさに［高橋氏がいわれる］感傷主義の文学にふさわしいものだといってよかろう。

かく呉興左遷の時期は、文学創作の方面にかぎれば、黄金時代だといってよかった。もしそうした時期がつづいておれば、江淹の「傑作の森」はさらなる広がりをみせ、その文風も進化をつづけたことだろう。ところが、そうした呉興の日々は、とつぜん終止符をうつことになった。それは、かつての主君、劉景素が宋の後廃帝に反

旗をひるがえし、そして殺害されるという事件がおこったからである。

呉興左遷から二年たった元徽四年（四七六、江淹三十三歳）の秋七月、劉景素はついに挙兵にふみきった。ところが景素の反乱は、宋廷が派遣した軍勢にあっけなく鎮圧され、景素は乱戦のなかで殺害されてしまったのだった。享年わずか二十五。

こうなった以上、江淹が呉興にとどまりつづける理由はない。なにしろ、呉興赴任を命じた景素自身が、この世からきえてしまったのだから。かくして［おそらく］その翌年、江淹は念願の北帰、つまり建康、そして故郷の京口への帰還を、はたすことができたのである。

では、帰郷した江淹、故郷でなにをしていたのか。当初は「無為論」などをつくって、「自分はもう仕官などはしない。田舎に隠棲する」などと吹聴していた。だが、その舌の根もかわかぬうちに、さっと蕭道成につかえたのである。宋廷の実権をにぎった道成から、声をかけられたからだった。景素の死からわずか一年後の、元徽五年（昇明元年）のことであった。

その後の官途は、きわめて順調だった。道成は、宋の後廃帝をころし、沈攸之らのライバルをけおとし、いっきに宋斉交替をなしとげた。すると道成につかえる江淹も、とんとん拍子に立身していったのである。彼の主要な任務は、道成の政治的文書の執筆（代作）だった。道成がまだ宋の廷臣だったときは、章や表の類を、そして斉朝を樹立するや、詔勅の文章を、さかんに代作した。さらに、高帝（道成の帝号）が没してのちも、彼の立身はつづいた。高帝没後は、詔勅の代作こそやめたものの、ひきつづき武帝（蕭賾）や明帝（蕭鸞）の信任をうけて、斉の廷臣として重きをなしたのだった。

この江淹、よほど世渡りが上手だったようだ。斉が梁に禅譲したあと、彼はまたもや、梁の武帝から厚遇され

たのだった。そして没するまで、武帝の治下で、金紫光祿大夫や醴陵伯等の高位を保持しつづけたのである。没年は天監四年（五〇五）、六十二歳のとき。大往生であった。かくみると彼の生涯は、前半生こそ、投獄（二十四歳のとき）、左遷（三十一歳のとき）、妻子の死（三十二～三歳のとき）など、苦難の日々がつづいたが、後半生（呉興から帰還してのち）になると、寒門出身の人物としては望外の立身をはたし、栄誉につつまれた日々をおくることができたといってよかろう。

ところが、冒頭でものべたように、彼の文学創作は、その生涯とは反比例の関係にあったといってよい。苦難つづきの前半生、なかでも呉興時代でこそ、彼の天才はもっともひかりかがやいた。ところが、順調に立身をかさねた後半生では、彼の創作は不振におちいり、晩年には世間から江郎才尽と揶揄されるほど、衰微してしまったのである。

なぜ、そうだったのか。それは、以前に拙稿「江淹評伝」でのべたように、江淹の文学創作のありかたに、原因があったのだろう。

彼にとって詩文とは、心中になんらかの感情や情念、たとえば「ああ、○○したい」「オレはかなしい」「まけてたまるか」等の思いが激発し、渦まいたとき、それにかられるようにして、創作するものであった。そうした感情や情念が、恨人たる彼の詩嚢を刺激し、ゆりうごかして、その結果、詩文がうまれおちてくるのである。その意味で、江淹の詩文は、彼の激した感情や情念の結晶のごときものだった。だからこそ、彼の詩文は「心のさけび」という美質を有し、人びとの琴線にふれる名作となったのである。

ところが後半生、江淹は蕭道成にみいだされ、立身してしまった。寒人出身者にはまれな、高位にのぼることができたのである。おかげで恨人ふう性格が衰微し、心中から発する「心のさけび」も、よわくなってしまった

（もちろん、斉の廷臣としての多忙さも、創作不振の一因だったろう）。かくして、彼の詩嚢はやせほそってしまい、けっきょく江郎才尽と揶揄されるようになったのである。彼を創作にかりたててきた、はげしい感情や情念の奔出。それがよわまり、衰微してしまった以上、もはや以前のごとき詩文は、つくりようがなかったのだろう。

かくみてくると、江淹の詩文の場合は（もちろん江淹にかぎって、であるが）、恨人ふうの「心のさけび」の有無や強弱が、名篇となるかどうかの分かれめだといってよさそうだ。すると、「心のさけび」が感じられぬ作は、江淹の美質が発揮されてないものといえ、あまり名篇とはいいにくくなるだろう。ここでは、そうした［私の見かたからすれば］名篇とはいいがたい作をしめしてみよう。それが「空青賦」である。

この賦は、呉興時代の作であるが、めずらしく「心のさけび」があまり感じられない。つよい悲痛の情も、北帰の念もないし、とうぜん屈原ふうの悲劇やヒロイズムもみられない。この「空青賦」は、［顔料としての］空青をたたえたものだ。すなわち、空青なる鉱物は、呉興の山中ふかくに蔵されている。山地をふみわけ、谷川をわたってこれを採集し、さまざまに加工をほどこすと、良質の顔料が精製できる。その顔料たるや云々――と、その価値を称賛しただけの作であり、それ以外の主張はとぼしいものである。

もっとも、このときの江淹とて、呉興に左遷された不遇感を、わすれていたはずはない。ただ彼は、この時期の自分について、後日に自撰文集への序文としてかいた「自序」において、

呉興の地は、東南の嶺外であり、ふるくは閩越の地であった。碧水や丹山があり、また珍木や霊草も生じていた。これらは、みな私が平生このんでいたものであり、辺地にきたとはおもわなかった。山中ではなにもおこらず、ひたすら道書を友としつつ、悠然と山中へはいっていったものだった。あるときなど、夕方になっても帰宅するのをわすれたほどである。そして山野を放浪したさいは、詩文をつくってたのしんだものだっ

た。

とのべている。道書（道教の書物）を友とし、山野を跋渉しながら珍木や霊草をさがしていた、という。つまり、江淹は「去故郷賦」や「四時賦」などで、左遷をなげき北帰の情をうったえていたが、いっぽうで道教にこって、山中で薬草さがしにも熱中していたのだった（もちろん前者のほうが真情であり、後者は、それがかなえられぬための代償行為だったのだろう）。

そうした山野を跋渉する日々のなかで、［山野に蔵する鉱物の］空青にも関心をふかめて、この「空青賦」をつくったのだろう。この賦は、内容的、また行文的に、たいへん難解なものであるが、とりあえずの拙訳をしめしてみると、つぎのようなものである。[12]

赤玉はあかるくひかるのが持ち前だし、碧石は光輝をはなつのが本来の性である。これらは、東の中華で珍重され、西の辺地でも大切にされている。ましてや空青ともなると、じつに貴重な鉱石であり、どこともしれぬ海外の地で採取されたものである。

この空青の産地は、たたなづく連峰の岩石のなか、また亀や龍が出入りする洞窟の壁のなか。そのあたりは、沙だらけの崖が雲のようにかさなり、朱砂が沙磧のようにひろがっているはずだ。［空青を内蔵する］岩石の外部には青苔や赤草が生じており、また内部には玉枝や瑪瑙もひそんでいるだろう。この空青は［顔料となるほか］、銅や鉛と合成されると、かたい黄金ができる。だからひとは、険路をふみわけ、蠶や螭がうごめく谷川をわたり、また春や秋の時節をなんどもこえ、怪異な岩をきりさいて、この空青をさがすのだ。そうでなかったら、どうして空青がりっぱな邸宅にはこばれ、君子の御前で披露されることがあろうか。

こうして空青［でつくられた顔料］は、雲や気をかたどり、神霊や神仙もえがくことができる。さらには

きれいな川波、華麗な山峰、日がでる暘谷の樹、日がしずむ崦嵫の泉、西海の草、炎州の煙、銀台で西王母につかえる鳥、周穆王がのった名馬、都広の国、番禺の野――これらすべてのものが、［顔料たる空青によって］一幅の絵のなかにえがかれ、鏡でみるかのように鮮明に描写されるのである。さらに、［絵のなかで］雲煙があらわれたり、日月がかがやいたりもするだろう。

上古の世のことは、あまりにもかけはなれていて、よくわからない。ただこの空青を顔料にすることによって、往時のようすも絵にすることができる。さらに、緑ゆたかな座敷や奥ぶかい高楼の絵では、この空青によってあでやかな蛟龍をえがき、華麗な大鹿の姿も活写することができる。また、鐘台に人物の神気や容姿をうつせるし、怪物や雷電の姿もえがけるのである。

くわえて、曲帳に絵つきの屏風もかけるし、素女に色つきの扇子ももたせられる。また錦の色はあざやかだし、その感じはのびやか。その錦に彩管をふるうや、濃淡もほどよく、［景物も］みえたりみえなかったりする。また山水が千変するようすも、赤青の色彩によって自在にうつしとれる。このようにこの空青は、百鎰ほどの価値があり、また千金をはたいてもよいほどである。

楚の夏姫や越の西施、さらに趙・燕の后妃たちや秦・呉の美女たちは、貴顕の人びとを夢中にし、その魂もとりこにすることができた。ただそれも、この空青が彼女らをきれいに化粧し、紅白をきわだたせたから、可能になったのである。その意味で、この空青は、唯一無二の宝ものというべきであり、これを入手できれば完全無欠の美女になれることだろう。

夫「赤瓊以炤燎為光、」「咸見珍於東国、況空青之麗宝、亦挺山海之不測。」
「碧石以萎蕤為色、」「並被貴於西極。」

其所処則
- 峻巘層石、
  - 亀穴龍壁、
  - 素岸成雲、
    - 外隠青苔丹草、
      - 銅鉛合生、
      - 磐確堅英。
    - 頼砂如磧、
    - 内伏玉枝瑪瑙、

自非
- 索険覓危、
  - 乗鼠履螭、
  - 倦春厭秋、能得廁於軒宇、接君子之光儀。

於是
- 寫雲図気、
  - 学霊状仙。
  - 宝波麗水、
    - 華峰艶山、
    - 陽谷之樹、
      - 崦嵫之泉、
      - 西海之草、
      - 炎州之煙、

- 銀台之鳥、
  - 穆王之馬、
  - 都広之国、皆
    - 番禺之野、
    - 咫尺八極、
      - 鏡見四荒、
      - 雲煙始出、
      - 日月既張。

若夫邃古之世、汗漫窈微。惟此青墨、所以造之。

至乃
- 翠燦軒室、
  - 蔥鬱台殿、
  - 雑蛟龍之文章、騁神形於鍾簧、舒怪物与雷電。
  - 発麟鹿之炳絢。

亦有
- 曲帳画屏、
  - 素女彩扇。
  - 錦色窈郁、点拂濃薄、如隠如見。
  - 綺質蔓衍、

山水万象、丹青四変。
- 咸百鎰之可珍、
  - 亦千金而不賤。

雖
- 楚之夏姫、
  - 越之西施、
  - 趙妃燕後、溺愛靡意、魂飛心離、
  - 秦娥呉娃、

候青艧為藻飾、方赩紅華与素儀。冠衆宝而独立、信求之而無虧。

いかがだろうか。この「空青賦」、空青の顔料としての価値を、大仰にたたえたものであることが、了解できることだろう。じっさい、この時期の江淹は、鉱物や華美な色彩に、つよい関心をもっていたようだ。[13] そうしたなか、江淹は［どこかから入手した］空青を目にして、そのすばらしさに興奮したのだろう。だとすれば、この賦は、恨人としての自己でもなく、屈原の模擬でもなく、また左遷のつらさでもなく、ただ「空青はすごいぞ」、それだけをいおうとした作だったとおもわれる。

ただし、可能性として、この賦に「空青＝江淹」の比擬があるとみなし、価値ある空青（江淹）が山中（辺鄙な地）にうもれるのをおしんだもの、と解せられなくもない（『江淹集校注』など）。だが、そうだとしたならば、この「空青賦」、他の賦にくらべて、あまりにも自尊の情がつよすぎるとせねばならない。もしこれを景素がよめば、「なにをえらそうなことをいっているのか」と、にくまれる可能性もあるだろう。そうかんがえるとこの賦は、自己を空青に擬した託物言志の賦などではありえない、と私はかんがえるのである。

これを要するに、この賦には、いかにも恨人ふうの「心のさけび」が感じられない。江淹自身の「これをうったえたい」という、はげしい衝迫があるようには、おもえないからである。それゆえ私は、この賦は呉興時代の作ではあるものの、江淹文学の美質（つよい「心のさけび」）が発揮された賦とはおもえず、つまり名篇とはいいがたいとかんがえるのである。

江淹の後半生になると、彼の創作はまったくふるわなくなる。彼が呉興から帰還した以後の賦作は、創作時期不明の「恨賦」「別賦」をのぞくと、わずか「知己賦」「横吹賦」「霊丘竹賦」の三篇にすぎない。呉興から帰還したのは元徽五年、江淹三十四歳のときだった。それから六十二歳で逝去するまでの二十八年間に、たった三篇しかつくっていないのだ（亡佚したものがあるかもしれぬが、それは呉興時代だっておなじことだ）。かかる賦

作の量的激減、つまり創作意欲の衰微ぶりに、まずは注目せねばならない。

くわえて後半生の賦は、内容もふるわない。この三篇のうち、「知己賦」は親友の死をいたんだものであるせいか、まだ「心のさけび」が感じられる名篇である［と私はおもう］。ところがのこる二篇は、修辞の卓越こそめだつものの、内容的には恨人らしさがあまり感じられない。『楚辞』の利用もすくなく、つよい感情の奔出もなくなっている。

この二篇のなかでも、とくに「霊丘竹賦」は、内容的に無味乾燥としかいいようのない、凡作だといってよい。どのように無味乾燥なのかについては、拙稿「江淹評伝」の「十　江郎才尽」でのべておいたので、関心あるかたはお読みいただきたい。要するに賦作に関しては、呉興より帰還して以後は、たしかに江郎才尽の語にふさわしい日々だったといってよかろう。

かくみてくると、この江淹というひとは、不遇や不如意の苦悩をうたうときにこそ、その才能がひかってくるタイプだったのだろう。彼は、高橋和巳氏がいわれたように、喜びや楽しみをうたう詩人ではなく、苦悩や感傷をなげく詩人だったのである。その意味で、恨人という性格（資質）、左遷という不遇（環境）、楚辞への共感（規範）――と三拍子そろった呉興の時代、そのころの諸作こそ、彼のもっとも成功した詩文、すなわち傑作の森だったといってよかろう。

これを逆にかんがえれば、江淹の生涯において、彼を失意や不如意におちいらせるようなできごと、すなわち不遇的体験がおこらなかったら、文学史に名をとどめるような傑作群は、うまれなかったのではなかろうか。前半生の江淹をくるしめた、つらい下獄や左遷などがおこってなければ、彼はその慎重な性格と先見の明とによって、さっさと立身していたかもしれない。だがそのかわり、文人としての名声は、もちえぬままでおわったこと

だろう。

とすれば、いわば人生の不遇が、彼の文名を不滅にしたということであり、まことに皮肉というしかない。そういえばベートーヴェンも、彼をくるしめたあの耳疾がなければ、どうだったであろうか。おそらく、ハイリンゲンシュタットの遺書をかくことはなかっただろうし、すると彼の「傑作の森」も、またちがった様相を呈していたかもしれない。

注

（1）江淹賦の創作年は、おもに以下の書物に依拠しつつ、僅少の私見もふくめて推定した。兪紹初・張亜新『江淹集校注』（中州古籍出版社　一九九四）、丁福林『江淹年譜』（鳳凰出版社　二〇〇七）、羅立乾・李開金『新訳江淹集』（三民書局　二〇一一）、丁福林・楊勝朋『江文通集校注』（上海古籍出版社　二〇一七）など。なお、断片の「井賦」（偽作？）と、賦と題されぬ「応謝主簿騒体」「劉僕射東山集学騒」「山中楚辞」などは、今回の考察からのぞいた。

（2）江淹「哀千里賦」への注釈は以下のとおり。訳注をつくるにあたっては、注1にあげた兪・張『校注』、羅・李『新訳』、丁・楊『校注』等を参照した。以下の各賦の場合もどうようである。なお、江淹の賦は難解なものがおおく、本稿での訳はすべて試訳ていどのものにすぎない。

○参差巨石――意味的には、上の「険如孟門」をうける。

○縦横亀鼉――意味的には、上の「豁若長河」をうける。

○秦皇未闢――「秦皇」は戦国秦の恵王。秦恵王は、五人の力士をつかって蜀への道をきりひらかせたという（蜀王本紀）。この地は、その秦恵王でさえ道をきりひらいておらぬ、未開の地であるということだろう。

○伊孟冬之初立――「伊（これ）孟冬の初めて立つや」と解する。「初立」を起家したこととととれば、五年前の大明七年（四六三）に、劉子鸞の幕下で従事になったことをさすことになる。疑問もあるが、とりあえずそう解しておく。

○魂終朝以三奪、心一夜而九摧――謝荘の「黄門侍郎劉琨誄」に「魂は終朝にして三たび奪われ、心は一夜にして九たび飛ぶ」とあるのを模したものか。「三」「九」は回数の多さをいうのだろう。

○徒望悲其何及――「徒しく望みて悲しむも其れ何ぞ及ばん」と解する。「徒望」は、「徒しく湘州への道のりを望みみる」ともとれるが、ここでは上の「自出国」二句とのつながりを重視して、「徒しく故郷を遠望する」の意と解した。したがって「其何及」も、「[この地では] 友と再会できるはずもない」と解した。

○雲車――雲の乗物。『淮南子』原道訓に「昔者馮夷・大丙の御するや、雲車に乗りて雲蜺に入り、微霧に遊ぶ」とある。

○蜺裳――蜺のはかま。『楚辞』九歌東君に「青雲の衣もて白霓の裳もて、長矢を挙げて天狼を射る」とある。

○惜重華之已沒――「重華」は舜帝の名。『楚辞』離騒に「沅湘を済りて以て南征し、重華に就いて詞を陳ぶ」とある。

○規行、矩歩――ただしく歩行する。転じて、行いが礼法に合致していること。陸機「長安有狹邪行」に「規行すれば曠跡無く、矩歩すれば豈に人に逮ばん」とある。

○爽塏――さっぱりとして、さわやかな気候であること。湿潤な気候の南方とはことなることを暗示している。

○橘柚之不遷――橘は湿潤な南国にのみ生じて、他の地にはえることはない。『楚辞』九章橘頌に「后皇の嘉樹、橘徠り服す。命を受けて遷らず、南国に生じたり」とある。そのように、自分も遠方（湘州）での生活はむつかしい、といいたいのだろう。

○及年歳之未晏――あまり年をとらぬうちに。「晏」はおそい。『楚辞』離騒に「年歳の未だ晏からず、時も亦た猶お其れ未だ央きざるに及べ」とある。

○霸山――霸陵山。後漢の梁鴻が、妻の孟光とともにこの山に隠棲した。

（3）「燈賦」への注釈は以下のとおり。

○淮南王――「淮南王」こと劉安は、学問好きだったが、とくに道家の学問をこのんだ。そしておおくの賓客をあつ

め、『淮南子』を編纂させた。

○信自――じつに、まことに。「自」は口調をととのえる接尾辞。

○小山儒士――淮南小山のこと。淮南王の賓客のひとり。『文選』にも採録される「招隠士」は、この淮南小山の作だとされることもある。

○恣霊修之浩蕩――『楚辞』離騒に「霊修の浩蕩として、終に夫の民心を察せざるを怨む」とある。

○釈心疑而未平――『荀子』解蔽に「心枝なれば則ち知無し。傾けば則ち精ならず。貳なれば則ち疑惑す。以て之を賛稽すれば、万物は兼ね知るべきなり」とある。

○侯服――諸侯の服、転じて諸侯をさす。下句の「処士」と対応する。

○心、器――「心」は燈の芯、「器」は燈の本体をいうのだろう。

○王遂賛善――小山が即興でつくった燈賦は、宋玉「風賦」（楚襄王の贅沢ぶりを諷した内容）を模した作である。小山が「風賦」を模しつつ、たくみに自分（淮南王）の贅沢ぶりを諷してくれたので、そこでそこで淮南王は、小山を「善なりと賛」した、ということなのだろう。

○恨不得与之同時――『漢書』司馬相如伝の「上は［司馬相如の］子虚賦を読みて、之を善して曰く、朕独り此の人と時を同じくするを得ざるかと」とある。

（4）「倡婦自悲賦」への注釈は以下のとおり。

○漢有其録、而亡其文――漢の目録に「倡婦自悲賦」が著録されていたが、いまは現存していないという。これはおそらく事実でなく、この賦をかくための仮設だろう。

○泣蕙草之飄落、憐佳人之埋暮――「埋暮」は「遅暮」とおなじで、美人が年をとることをいう。『楚辞』離騒に「草木の零落するを惟い、美人の遅暮するを恐る」とあるのを模したものか。この二句では、「泣」「憐」などの感情語は、いかにも江淹の恨人（多情多恨な男）らしさを感じさせる。

○君王更衣――着物を着がえること。当時、便所にいったとき着物を着がえる習慣があったので、便所［へゆく］の意もある。ここでは漢武帝が更衣のさい、衛子夫を寵した故事（『史記』外戚世家）をふまえて、君王の寵愛をえる、の意でつかっている。

○露色未晞――『詩』小雅湛露に「湛湛たる露は、陽に匪ざれば晞かず。厭厭として夜も飲め、醉わざれば帰ること無かれ」とあるのにもとづく。ここでは、夜露は朝陽をあびないとかわかない意から、舞姫が朝までずっと君王に寵愛されることをいうのだろう。

○願南山之無隙――「南山」は、『詩』小雅天保に「月の恆るが如く、日の升るが如く、南山の寿の如く、騫けず崩れず」にもとづく。日月が変化せざるごとく、終南山がくずれぬごとく、永遠に長生きする、の意。「無隙」は、仲たがいしない、の意。ここではなかよく、ふたりで長生きする、の意でつかっているのだろう。

○指壽陵以同帰――壽陵を指さして、同穴せんとねがう、の意。壽陵は、君王が生前に造営した墓。「同帰」はおそらく「同穴」とおなじで、『詩』王風大車の「穀きては則ち室を異にするも、死せば則ち穴を同じくす」をふまえるのだろう。

○緑衣坐奪――「緑衣は坐を奪う」と解する。ここの「緑衣」は、『詩』邶風緑衣をふまえて、正室が妾に位をうばわれる意を寓する。

○白華臥進――「白華は臥を進む」と解する。ここの「白華」は、『詩』小雅魚藻をふまえて、妾が正室をしりぞける意を寓するのだろう。前漢の班倢伃「自悼賦」にも、「緑衣と白華、古より之有り」などとある。

○屑骨――粉骨して努力する、の意か。

○廓処――ひとり孤独にすごす。江淹より後のひとだが、伏挺の「致徐勉書」に「加うるに静居し廓処し、影を顧るも酬ゆる莫きを以てす」という用例がある。

○畏松柏之無余――班倢伃「自悼賦」の「願わくば骨を山足に帰して、松柏の余休に依らしめんを」を模した表現だ

ろう。

○若使明鏡前兮、碎孤雁之錦翼――典拠未詳。あるいは范泰「鸞鳥詩序」のつぎのような話柄を、ふまえるのかもしれない。むかし罽賓王が一羽の鸞鳥を手にいれ、かわいがったが三年たっても鳴き声をあげなかった。夫人が「鳥は仲間をみると声をあげるそうです。鏡にうつしてみたらいかがですか」といった。そこで王が鏡を鸞鳥の前においた。すると、鸞鳥は鏡に映じた自分の姿をみるや、つれあいだと勘違いして、かなしげな声をあげ、すぐ息たえてしまった（『芸文類聚』巻九〇）。

（5）「麗色賦」への注釈は以下のとおり。

○楚臣既放――『楚辞』漁父に「屈原既に放たれて、江潭に遊ぶ」を模した表現だろう。

○魂往江南――『楚辞』招魂に「魂よ帰り来れ、江南哀し」とある。

○巫史――『楚辞』招魂では、巫陽というかんなぎが登場して、屈原の魂をよびよせている。江淹はその手法を模して、この「巫史」に「説」をかたらせる形式をとったのだろう。

○絶代独立――李延年「歌」の「北方に佳人有り、絶世にして独り立つ」をふまえる。

○東鄰之佳人――宋玉「登徒子好色賦」の「天下の佳人は……臣の東家の子に若くは莫し」にもとづく。

○其始見也、其少進也――宋玉「神女賦」の「其の始めて来るや、耀乎として白日の初めて出でて屋梁を照らすが若く、其の少しく進むや、皎きこと明月の其の光を舒ぶるが若し」を模したものだろう。

○叫帝閽而延佇――『楚辞』離騒の「吾　帝閽をして関を開かしめんとすれば、閶闔に倚りて予を望む。時に曖曖として其れ将に罷まらんとす。幽蘭を結んで延佇す」にもとづいた表現。

○比之無色――宋玉「神女賦」の「其の象は無双にして、其の美は極まり無し。毛嬙は袂にて鄣りて、程式するに足らず。西施も面を掩いて、之に比ぶるに色無し」に依拠したもの。

○当衢横術――「衢に当たり術に横たり」と解した。

○耀邯鄲之躍歩、媚趙北之鳴瑟――左思「魏都賦」に「邯鄲の躍歩、趙の鳴瑟あり」とあるのに依拠したものか。
○月出於陳歌――『詩』陳風月出の詩。この詩は小序によると、「好色を刺るなり。在位は徳を好まず、美色を説べればなり」というものだという。
○感蔓草於衛詩――『詩』鄭風野有蔓草の詩。この詩は小序によると、「君の沢は下に流れずして、民は兵革に窮まる。男女は時を失い、期ならずして会するを思う」というものだという。
○気炎日永、離明火中――「気は日永に炎く、離は火中に明るし」と解した。「日永」は夏至。「離」は日。『易』説卦に「離は火と為し、日と為す」とある。「火中」は、ここでは星の名。夏の夜、南の空にみえる。
○楚王之心悦――楚王が夢で神女とであい、「私心に独り悦」んだという話（宋玉「神女賦」）とをふまえるのだろう。
○漢女之情空――『列仙伝』のつぎのような話をふまえる。鄭交甫が漢水の浜で二仙女とであい、歌を唱和しあって美珠をもらう。だが、彼がその場をたちさろうとしたとき、その美珠はきえていて、ふとみれば二仙女の姿もみえなくなっていた。
○新台之青楼――『詩』邶風新台にもとづく。衛の宣公をそしった詩。衛の宣公は、息子の新妻が美人だったので、これをうばって新台の青楼（たかどの）にすまわせたという。
○上宮之邃閣――『詩』鄘風桑中にもとづく。衛の風紀がみだれて、男女が礼をやぶって勝手に密会するようになったことを嘆じた詩。「上宮」は、その密会の地名。「邃閣」は、［密会用の］おくまった小部屋。上句と正対をなすとすれば、麗人は、「上宮之邃閣」をよいものとおもっていないのだろう。
○駐髪還質――頭髪を黒色にとどめ、顔つきも少女にもどる、の意。下句の「星や龍にのって御する」（驂星馭龍）とあわせると、この麗人は仙女ふうな能力も有していたようだ。
○保其家邦――『詩』大雅思斎に「［文王の徳たるや］寡妻を刑らしめ、兄弟に至り、以て家邦を御む」とあり、これを模した表現か。

○耀影汰跡、縈魂灑魄――「影を耀かし跡を汰い、魂を縈んにし魄を灑う」と解する。「影」は形貌、「汰」「灑」はあらいおとす。「縈」は「栄」に通じ、さかんにする、の意と解した。

（6）この「麗色賦」については、定情（欲情をしずめる）の賦系統の作だとみなす見かたもあるようだ（『江文通校注』二七八頁）。しかし、それは是にあらずというべきだろう。たしかにこの賦中には、たぐいまれな美人が登場してはいる。だがそれは、禁欲の対象として叙されているのではなく、不遇にくるしむ作者（江淹）自身の姿が、濃厚に投影された存在なのである。それゆえこの賦は、懐才不遇が主題であって、定情の賦系統の作などではありえないといってよかろう。

（7）この「青苔賦」に対しては、呉不績以下の諸家がそろって呉興時代の作とする。というのも、序文に「鑿山楹為室」（山中の岩石をけずって岩屋を住まいにする、の意。もとは『楚辞』哀時命の語句である）とあるからである。この句は、やはり呉興時代につくられた「鑿山楹為室、永与黿鼉為群」（被黜為呉興令辞箋詣建平王）や「臨虹蜺以築室、鑿山楹以為柱」（待罪江南思北帰賦）とよく似ており、おそらく同時期の作だとかんがえられる。ただ、この賦は感情面では、ややおちついた感じを有するので、呉興に到着してから、しばらくたってからの作だろう。

（8）「青苔賦」への注釈は以下のとおり。

○横澗俯視――「俯視横澗」（俯して横澗を視る）の倒置だろう。

○崩壁仰顧――「仰顧崩壁」（仰いで崩壁を顧る）の倒置だろう。

○異人――「道士」と対比から、ここも同種の人びとをさすのだろう。隠者ら、と訳しておいた。

○鏡帯湖沼――「鏡のごとく湖沼に帯びたり」と解した。

○錦匝池林――「錦のごとく池林に匝る」と解した。

○游梁之客、徒馬疲而不能去――梁孝王が、遊説の士を周囲にあつめた故事をふまえる。『漢書』司馬相如伝に「梁孝王来朝するや、游説の士の斉人鄒陽、淮陰枚乗、呉厳忌夫子らの徒を従う。［司馬］相如見て之を説ぶ。因りて病もて

免れ、梁に客游し、諸侯の游士と居るを得たり」とある。下句は、鄒陽や枚乗たちが、彼のそばをはなれなかった、ということか。

○兎園之女、雖蚕飢而不自禁――枚乗の「梁王菟園賦」に「嘉客を見て帰る能わず。桑萎え蚕飢えたり。中人望むも柰何せん」とあるのをふまえるのだろう。

○零露下兮在梧楸、有美一人兮欲以傷――『詩』鄭風野有蔓草に「野に蔓草有り。零露漙たり。美なる一人有り。清揚婉たり。邂逅して相遇はば、我が願いに適わん」とある。また『詩』陳風沢陂に「彼の沢の陂、蒲と荷と有り。美なる一人有り。傷えども之を如何せん。寤寐為す無く、涕泗滂沱たり」とある。とすれば、ここの美人は、よき伴侶が出現せぬのをかなしんでいるのだろう。

○崩隍――『易経』泰山卦に「城［くずれて］隍に復る」とある。隍の土でつくった城壁が、くずれてもとの隍の土になってしまう、の意。

○毀塚――『詩』小雅十月之交に「百川沸騰し、山冢崒く崩る」とあるのをふまえた表現だろう。「冢」は、山のいただき。

○彼木蘭与豫章、既中繩而獲夭――「中繩」は、樹木が墨縄にあてられる、つまり適合し、有用であるの意。『荘子』逍遙遊に「吾に大樹有り。人は之を樗と謂う。其の大本は擁腫して繩墨に中らず。其の小枝は巻曲して規矩に中らず。之を塗に立つれば、匠者顧みず」とある。

○及薜荔与蘼蕪、又懐芬而見表――「薜荔」「蘼蕪」はともに香草の名。張衡「南都賦」に「其の香草には則ち薜荔、蕙若、薇蕪、蓀、萇有り。晻曖蓊蔚として、芬を含み芳を吐く」とある。

（9）「石劫賦」への注釈は以下のとおり。

○春而発華――郭璞「江賦」にも「石劫は節に応じて葩を揚ぐ」とある。どうやら当時、石劫は貝ではあるものの、花をさかせるという誤解がひろまっていたようである。

○具品色於滄溟――「品色を滄溟に具う」と解した。「品色」は等級の意であり、「自分は、それなりの等級を有している」と、石劫が自慢している意ととった。こうした擬人的表現は、序文でいう「戯書」（たわむれにかいた）なのだろう。

○爐天而鑄物――天地の炉のなかで物（石劫）として鋳造された、の意。賈誼「鵩鳥賦」に、「夫れ天地を鑪と為し、造化を工と為す。陰陽を炭と為し、万物を銅と為す。合散消息し、安んぞ常則有らん。千変万化して、未だ始めより極まり有らず」とあるのを下敷きにしたのだろう。ただこの句、下の「翕化而染霊」句ともども、石劫の生まれをかたるには、いささか大仰な叙しかたであり、これも「戯書」の一環だとおもわれる。

○委羽、窮髪――ともに極北の不毛の地。

○日照水而東升、山出波而隠没――この二句は難解だが、諸注釈にしたがって、「日東升而照水、山隠没而出波」（日の東に升れば［石劫は］水より照らし、山の隠れ没すれば［石劫は］波より出づ」の意に解した。

○去海人之仄陋、充公子之嘉客――ここの「辺鄙な海沿いにすむ連中」（海人之仄陋）とは、呉興沿海部にすむ漁師たちをさすのだろう。したがってこの二句は、「自分ははやく辺鄙な呉興の地をさって、劉景素のもとにかえりたい」の意を寓しているのだとかんがえられる。

○委身――ここでは、［劉景素に］お仕えする、の意を寓しているのだろう。

(10)「四時賦」の冒頭には、「北方からの旅人である私は、いつもすすりなき、深山の岩屋でさびしい日々をすごしている」（原文は「北客長欷、深壁寂思」）とある。さらに内容からみて、この賦の執筆時点で、江淹は呉興で四時（春夏秋冬）をすごしているようだ。すると、この賦の創作時期は、呉興左遷二年目（元徽三年　四七五）の秋以降だとみなしてよかろう。

(11)「四時賦」への注釈は以下のとおり。

○空床連流――ひとりぼっちの寝台でぐずぐずしている、の意。「空床」は、妻がおらぬ意を暗示するのだろう。江淹

は妻の劉氏［と子どもたち］を京口におき、単身で呉興に赴任していた。このとき妻はまだ京口でいきていたが、翌年には病死してしまった。

○圭竇――くぐり戸。ここでは、江淹が独居する陋屋の意でつかっているのだろう。

○臨飛鳥而魄絶、視浮雲而意長――『楚辞』九章思美人の「言を浮雲に寄せんと願い、豊隆に遇うも将われず。帰鳥に因りて辞を致さんとするも、羌迅く高くして当たり難し」をふまえたもの。

○眷庭中之梧桐――「梧桐」は音通で「吾童」をさす。するとこの句は、［現実にはいない］庭中のわが息子をかえりみる、の意となろう。

○念機上之羅紈――「羅紈」は細絹の意で、暗に妻をさす。するとこの句は、［現実にはいない］機上のわが妻をおもう、の意となろう。秋の一日、単身赴任の江淹は、妻子のことをおもっているのだろう。

○冬陰北辺――江淹赴任している建安郡呉興は、建康より南方なので「北辺」にはあたらない。ここでは、北地ではこうだろうと想像している、ということか。

○軫琴、戛瑟――ともに、琴をひくの意。

（12）「空青賦」への注釈は以下のとおり。

○東国――中国東方の斉魯などをさすが、ここでは下句の「西極」（西辺の地）と対応して、東方の文明国ぐらいの意だろう。

○自非――「断異鐫奇」までかかる。「……異を断ち奇を鐫つに非ざるよりは、能く……するを得んや」の構文である。

○陽谷、崦嵫――ともに古書や古伝説にあらわれる、遥遠の地の名。陽谷（暘谷）は日がのぼる地、崦嵫は日がしずむ地だという。以下の「西海」「炎州」「都広」「番禺」「八極」「四荒」も、おなじく遠地の名である。

○銀台之鳥――西王母のすまう地が「銀台」。その西王母の信使の役をはたす青鳥が、ここの「鳥」だろう。

○穆王之馬――周穆王がのっていた八頭の駿馬。

○咫尺八極、鏡見四荒――ともに尺幅千里（ちいさな絵に広大な風景をえがく）をいうのだろう。それを可能にしているのが、空青なのである。

○雲煙始出、日月既張――空青でえがいた絵では、雲煙があらわれたり、日月がかがやいたりしていること。ここでは、自然の微細な動きまで描写できるということか。

○惟此青墨、所以造之――「惟だ此の青墨のみ、以て之を造（えが）く所なり」と解した。

○雖楚之夏姫……方赩紅華与素儀――この「雖」は「魂飛心離」までかかる。「楚の夏姫と……らは、［貴顕をして］溺愛して意を摩（な）くし、魂飛び心離れしむと雖も、青雘もて藻飾と為すを候（ま）ちて、方に紅華と素儀とを赩（あか）くせり」と解した。「青雘（せいわく）」は空青のことだろう。

（13）松浦史子「江淹〈五色の筆〉新考―山海経・郭璞の系譜から―」（「中国詩文論叢」第二一集　二〇〇二。のち、『漢魏六朝における山海経の受容とその展開』〈汲古書院　二〇一二〉に収録）による。

参考文献

本稿は、内容的に前稿「江淹評伝」をつぎ、いささか補足せんとするものである。それゆえ、前稿の末尾にあげた参考文献は、ひきつづき参照させていただいている。それにくわえて、本稿でとくに参照したものを、以下にあげておこう。

○馮明徳「略論江淹賦的悲情審美」（「甘粛教育学院学報」一九九八――二）

○劉濤「江淹辞賦悲愁怨恨主題分析」（「棗荘師範専科学校学報」二〇〇三―四）

○郭建勛「論南朝女性題材辞賦的貴族化」（「中国文化研究」二〇〇四夏之巻）

○林晨「江淹抒情小賦的美学意蘊」（「安慶師範学院学報」二〇〇七―六）

○劉占召「試論楚辞対江淹文学創作的影響」（「許昌学院学報」二〇〇八―一）

○于浴賢「論江淹貶謫閩地賦的価値和意義」（閩江学院学報」二〇一二―四）

○黄妙芸「論江淹三篇賦中女性形象的継承与創新」（「文教資料」二〇一四―一八）
○時国強「江淹対楚辞的学習与運用」（「渭南師範学院学報」二〇一四――二一）